

常滑市民俗資料館

研 究 紀 要 IV

1990

常滑市教育委員会

はじめに

常滑市民俗資料館の研究紀要は、昭和59年3月以来、隔年発行という変則的な形をとりながらも今回、第4巻を上梓することとなりました。資料館、博物館における諸活動の根底には、常に研究成果の裏付けが求められていることは周知の事柄であります。しかしながら、いわゆる小規模館に属する当資料館の研究体制は最小規模の状態に止まり、けして充分なものとはいえません。このような状況下にあっては、その研究も必然的に対象を限った内容とならざるをえません。

当館の所在地、常滑市は、中世以来の窯業産地として知られ、その歴史、民俗も焼き物づくりと切り離し難く結びついています。従って小誌も継続的に常滑窯業に関する中世、近世、近代の事象を取りあげてきました。しかし、このように研究対象を限定しても、なおまだその深淵を覗き見た程度の現状といわざるをえず、今後より一層の研究が望まれるところであります。

館の体制では及ばぬ領域については、これまで多くの先生方より御協力を頂き、さらに資料館友の会の諸賢による地道な学習活動も有力な支えとなっています。

ささやかな研究誌ではありながら、本書の刊行に際しましては、多くの皆様方より御協力を頂戴いたしました。ここに深くお礼申し上げますとともに、今後より一層の御指導、ご鞭撻をいただきますようお願い申し上げます。

常滑市教育委員会
教育長 竹内鉄英

目 次

| | |
|--|----|
| 『観光と博物館』に関する序論（長谷川進）…………… | 1 |
| 三筋壺・その造形と意味をめぐって（中野晴久）……… | 7 |
| 古文書解読資料集・富本家文書 （民俗資料館友の会古文書部会）…………… | 53 |

『観光と博物館』に関する序論

常滑市民俗資料館 館長

長谷川 進

○はじめに

博物館は〈苦痛なき学習センター〉と呼ばれるように、利用者の自主性と主体性に呼応して作用するものである。

博物館を利用すべき関心・対象をもつ人々は、自己のテーマの資料情報を求めて時間的・空間的な壁を乗り越えながら精力的に博物館のハシゴを続ける。そうでない人々にとっての博物館にたいする感情は、次のようなものである。

①文明・文化の社会的墓場。②珍奇物の集会所。③自分とは無縁の高貴な宝物殿。④好事家、暇人がでかけるところ。⑤観光地にある名所・旧跡のひとつ等々。

こうした博物館に対する一面的な見方は、博物館利用者が増大しつつある今日においても、まだまだ一般的であり、地味な自然科学系・歴史民俗学系の博物館等であればあるほどそうした先入観をもたれる度合いは強いと言えよう。博物館の存在姿勢というものは、本質的には受動的なものなのであり、そこが博物館にたいする偏った認識が発生するひとつのゆえんとなっているところであるけれども、この存在姿勢としての受動性は、博物館にとっては基本的な意味において重要である。なぜならば、そうした姿勢を保持することにより、様々な利害関係による変形あるいはそれらへの迎合を排除しながら博物館の存在は守られてきているのである。さらにまた博物館は、時代のニーズを先取りしてその実現に向かうための知識・技術を直接的・即効的に授けるブラックボックス（魔法の箱）として機能するものではない。博物館のもつこうした学術的孤高性は、ともすれば独善性・閉鎖性におちいりやすい傾向をもつものであるけれども、博物館のようなもの始源はともかく、近代市民社会に市民・国民の共有財産として誕生し、それを今日まで継承してきたという博物館存在基盤の歴史的意味を考えると独善性や閉鎖性は強く排除されねばならない。

このように、〈内容論からの学術性〉と〈活用論からの大衆性〉という二重構造の上に立脚している存在である博物館にたいして、生涯学習社会の到来！ということで、大きな希望と期待が熱い視線を伴って寄せられている。〔このような状況を反映して、昨年（1989）11月に名古屋市において開催された第37回全国博物館大会の大会基本テーマは『生涯学習と博物館Ⅱ～その発展のための現状と問題点～』であり、また同月末に開催された三県～愛知・岐阜・三重～博物館交流研修会の中心テーマは『開かれた博物館・受け身でない博物館』であった。〕

これまでの、学校教育中心主義を基盤とした従来の教育社会から生涯学習教育社会への転換を要請する社会的要因として色々列挙されている中で、その骨子となっているものは、〈自立した余暇の登場〉を背景とした〈充実した人生を送るための、科学技術の飛躍的な発展と複雑な社会構造の変化に対応する新しい知識・技術習得の必要性〉であるととらえることができよう。そし

て、そこに志向されているものは〈学習者の自主性と主体性（各個人の必要性と自由意志）とに基づいて選択されたテーマと方法により生涯を通じて行われる学習〉であることがとりわけ強調されている。

教育における自主性・主体性及びそれが展開される場所の時間・空間の全面性は、今に唱えられる特別目新しいことではない。それらは我が国のあらゆる教育の原点というべき教育基本法の第1条：教育の目的『教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたっぴ、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。』、第2条：教育の方針『教育の目的は、あらゆる機会に、あらゆる場所において実現されなければならない。この目的を達成するためには、学問の自由を尊重し、實際生活に即し、自発的精神を養い、自他の敬愛と協力によって、文化の創造と発展に貢献するように努めなければならない。』の中に原理的にうたわれていることであるけれども、昭和56年6月に中央教育審議会が『生涯教育』についての答申を出し、さらにまた、昭和62年8月には臨時教育審議会が生涯学習体系への移行を中心とした答申を公表してきたことは、それを展開すべき社会状況の到来を重視してのことであると思われる。

1. 余暇社会状況と観光

現代社会状況の特徴づけるものには情報化、国際化、高齢化、管理化、大衆化など様々な要素があげられるけれども、利用者の自主性と主体性を重んじる博物館が特に関心を払わなければならないもののひとつは、まさに自主的、主体的時間・空間であるところの余暇の問題であると考えられる。この余暇こそ生涯学習を可能にする重要な必要条件のひとつなのである。

我が国において余暇が生活価値観として人々の意識にのぼったのは、1960年代以降のいわゆる高度成長経済期の中である。〈レジャー〉などとカッコヨク表現された余暇は、知らぬ間に〈ヴァカンス〉などと変わりながら人々を海へ山へと駆り立てた。

高度成長時のバラ色の夢をまとったこの頃の余暇は、必ずしも〈自立した余暇〉とは言えず、レクリエーションという範疇を脱し得ないものであった。それはあくまでも労働を主としての従属物として認識され、その労働によって消費される肉体的・精神的エネルギーの再生産（再創造）＝re-creation、再補給として位置付けされていた余暇であったといえよう。

しかしながら、今日の生涯学習社会状況を構成するものとして注目されている〈余暇〉とは、決して労働に従属するものではなく、そこから自立して、労働と同等もしくはそれ以上の独自の価値を有する存在として認識されているものである。人間が選択した結果としての機械化・管理化の促進、という状況が必然的に生み出すところの部分化・細分化された労働に代わって、自己の主体性と自主性に基づく自己実現の可能性を追究していくべきもうひとつの価値ある人生の場として、〈自立した余暇〉に対する大きな期待が寄せられているのである。反面、余暇の増大は多くの不安を投げかけている事実も見落とすことができない。それは従来の観念のように『小人閑居して不善をなす。』という個人論の次元ではなく、深刻な社会現象としてすでに先進産業国において提起されている問題である。

拡大する余暇とそれを選択する人間の能力との間の大きなギャップは、ある面からは＜自由からの逃亡＞という逆説を発生させ、大きなエネルギーをもって社会に対峙する。無責任な社会的風潮、狂信をバックにした全体主義的傾向、幼児性への退行、冷淡な利己主義、アルコール・麻薬中毒等の薬物による肉体的・精神的破壊や現実逃避などの様々な反社会的行動や、その日常的固定化である反社会集団の形成となって現れてきている問題である。また、こうした過激な問題のみならず、医学や食生活の発達をもたらした高齢化社会の中における老人（第二の人生を生きる人）の生きがいの問題も重要なテーマとして論議されている。このように余暇の拡大は、“余暇の増大イコール無限の価値の創造”という楽観主義的な図式や予測を描けるほど単純ではないけれども、さりとて、余暇のマイナス面を危惧するあまり、＜その性格からいって極めて私的部分に属する余暇＞を、公的力による統制や強制的管理をすることは許されるべきではない。このことは、余暇問題を考えるうえでもっとも重要な基本的態度として認識されねばならない。

ところで＜自分自身のために、自己の意志に基づいて自由に自己の時間を使用する＞という余暇の本質にもとづく現代余暇活動の実態や、その将来展望をながめてみると、その中で圧倒的に大きな比重を占めているものは観光であることに気付く。

1981年3月の（財）余暇開発センターのデータによる『年1回以上活動者の余暇活動参加率』の上位10位を見ると、1位：外食、2位：トランプなどの室内ゲーム、3位：国内観光旅行、4位：バー・スナック・パブ・飲み屋、5位：ドライブ（以下略）である。また、1988年12月、同センターが4000人を対象におこなった『週休2日制が実施されたらどんなレジャーを過ごすか。』という趣旨のアンケート結果によれば、上位ベストスリーは1位：海外旅行（32%）、2位：国内旅行（14.7%）、3位：キャンプ（11%）であり、以下ゴルフ、スキー、書道、音楽（コンサート）鑑賞、などと続いている。

さらまたこの傾向は国内のみならず世界的視野の中においても、『近年、観光旅行の量的な拡大はすさまじい。1950年に全世界で一年間に外国旅行をした人は2500万人だったが、1970年には1億6000万人、1980年には2億8000万人と増え、昨年は4億人を越えよう。日本人の海外旅行者も昨年、1000万人に達した。21世紀は＜ネオ・ノマッド（新しい遊動民）の時代＞といわれ、…中略…、21世紀の基幹産業は観光関連産業、という予測もされている…以下略…。』と、国立民族学博物館助教授の石森秀三氏は1990年1月16日付の朝日新聞論壇『観光現象の総合的な研究必要』の中で述べられている。

2. 「観光と博物館」における発展的関係の基盤

こうした、人々の観光への欲求・行動が拡大する現実に注目し、博物館にとっての観光の意味や相互の発展的関係を考察することは、＜自立した余暇＞を背景とする生涯学習のための教育機関のひとつである博物館の積極的展開を図る上で極めて重要なことであると考えられる。それは、人々が日常空間から飛び出す機会が量的に大であるからという単純な来館者増大期待論を越え、博物館の本質的部分において観光とのかかわりをみるからである。

観光の『観』は易経上傳の卦にある（風地観 $\begin{smallmatrix} \text{☱} \\ \text{☷} \end{smallmatrix}$ ）である。易経（中国の思想第7巻：徳間書

店, 1974.) の解説によれば『観は凝視すること、ただ漠然と見るのではなく、よくよく見つめる、奥底まで見抜くことである。この卦の形は、陰の勢力（――）が上の陽（―）を押しつけるばかりの勢いを見せており、また地上（☷ 坤）に風（☴ 巽）が吹き荒れているさまを表している。君子道が衰え、利欲がせめぎあってまさに秩序崩壊のときである。しかし、こういう時こそ静思して現象の奥底まで見抜かなければならない。そういう態度が本当に身につけば、徳となって人々を感化することができる。（以下略）』とある。そして、観光という言葉は、同卦の卦爻辞（その卦の陰陽六爻それぞれの、吉兆判断のための辞）にある『国の光を観る。用（も）って王に賓たるに利（よ）ろし。』に由来するものであり、転じて『他国の文物光華を視察すること。』『他国の山水風俗を遊観する。』の意であると、字源（角川書店, 1974）に見える。こうした原義に照らし合わせるならば、〈観光〉とは己を知りそれをさらに輝かすために行動しながら他にたいする〈観（よくよく見つめる、奥底まで見抜く）〉を実践することだと考えられる。この〈観〉は、まさに博物館における物との対話のありかたそのものを示している。

『テレビジョンを発明した科学者は、強度の近眼の持ち主であった。』などのジョークもあるが、いながらにして遠くのもの、そこで起きている事象をリアルに（数量化、抽象化されたものではなく具体的な現在を）見たいという人間の欲望がテレビジョンを生み出した。通信技術も加速度的に発達し、宇宙衛星放送技術なども駆使して世界中の事件・状態はもとより宇宙のありさままで茶の間という日常空間の中で疑似体験することが可能となった。そしてそこから受ける多量の情報が、さらに人間のもつ直接体験への欲望や日常空間からの脱皮欲を刺激して観光志向を相乗効果的に増幅させているのであり、余暇の拡大と交通手段の発達がその実現を可能にしている。

観光における人間の行為はまた、般若心経でいうところの『眼、耳、鼻、舌、身、意』が欲する対象としての『色、声、香、味、触、法』を非日常的時間・空間において満足させる行為と表現することができる。日常生活環境とは異なった自然や風俗・文化について、見たり、聞いたり、味わったり、感じたりする観光行為は、そこに訪れる人々と現地の人々が交流する場所を自然につくりだし、互いの理解を促進させる絶好な機会となる。と同時に、そうした交流の中で来訪者の眼を通じた地域の印象や観察結果を知ることにより、現地の人々が見落としていた地域のもつ新しい価値を、地域自身が自己発見するという貴重な作用をももたらしてくれる可能性をもつ。

自他相互の歴史や自然、そして風俗・文化を理解、再認識し、それを基盤にして人類全体の共通理解はもとより地球生命体相互の平和共存（共生共栄）を促進させていくことは、博物館がめざすべき大きな目標であるばかりでなく、〈観光〉が原義的に有しているところのものである。ここに、「観光と博物館」の相互関係を発展的に考察するうえでの本質的基盤が存在すると考える。

こうした観光のもつ積極的な意義の貴重な歴史的事実を、前掲論壇の中で石森氏は次のように紹介している。『…中略…以外に知られていないことだが、故ケネディ米大統領は米ソ冷戦によるキューバ危機を経験したことによって、相互交流を促す国際観光の重要性に気づき、政府観光局を創設した。国際観光は平和創出のための有効手段でもある…以下略…。』と。

3. 「観光と博物館」をめぐる問題と課題

しかし現実問題としては、このように重要な役割を持つ観光に対しての一般的な認識の度合いは、『国際（国内）観光は世界（日本）の国々（各地域）に大きな影響を与えるのに、観光現象を体系的にきちんと研究する体制が、各国とも整えられていない。日本の国立大学には、観光学の講座すら設置されていない。…以下略…』（カッコ内は筆者による。）という状態であると石森氏は嘆いてる。こうした観光についての研究や教育普及の立ち遅れが、人々の観光意識水準の向上を停滞させている状態に加え、博物館側の観光に対する消極的関心とがオーバーラップして、相互の本質的な発展的関係を内在させているにもかかわらず「観光と博物館」の間にこれまでに様々な問題を生み出してきた。

一般的現状として、観光行為をする人々は学習しようなどという構えた意識などは当然なく、その行動は、楽しく、珍しく、新しく、自由に〈直接体験〉を過ごそうという強い娯乐的欲求に基づいてものである。従って、観光の側から博物館側に常時期待されてきたものは集客率を高めるための当然の帰結として、通俗的な意味での興味本位主義や、話題性の高い豪華主義を内容としたものである。こうした観光の要請にたいして博物館側が示した基本的態度は、それらに対するアンチテーゼとして、学術的孤高性（もちろん博物館の本質的姿勢ではあるけれども）に立脚しての、観光側の過度な商業主義にたいする強い嫌悪感・対立意識及び内容の際物的通俗変形へ落ち込むことへの危機意識や、質の悪いマス見学（時間調整のための通過的滞在、トイレ休憩所としての利用、観光的解放感からのマナーの低い見学）による館内ムードの破壊に対する拒絶等である。このような状況の中で観光的集客のみを一面的に重要視する余り、博物館の〈責任ある社会的貢献の源泉〉であるところの〈学芸・研究活動〉の縮小をもたらすという、博物館にとっては致命的ともいうべき現象もこれまでにみられてきている。さらに、「観光と博物館」との間に立ちだかる大きな問題は、いわゆる観光開発が自然環境や、人間・文化環境の破壊を促進させる危険性をはらんでいるということである。観光客が求める利便性（不便を楽しむ観光も例外的にないとは言えないが）や娯楽性に応えていくために、観光は条件整備として道路やホテル、そして周辺の関連レジャー施設等の建設・整備を大規模に行う。そうした行為の中で貴重な自然環境が破壊されて行くという問題を発生させる一方、観光に迎合する形で特色ある地域性とそこに培われた伝統的文化の変形・破壊が行われるという問題をはじめとして観光流入人口の増大は地域におけるその他様々な文化的、社会的問題をもたらしている。

歴史の証言者として地球上の物と環境を保存・記録していくという役割をもつ博物館は、こうした観光が発生させる問題については常に重大な関心をもちつづけるとともに、必要な場合においてはこのような環境破壊に対する学術的調査研究に基づく警告や、その破壊から環境を守るための積極的な啓蒙活動を展開していく責務をもつべきものであると考える。この博物館が果たすべき環境監視センター、環境資料情報センターとしての役割・機能は今後ますます重要なものになっていくであろう。

ところでこのような観光状況に対応して、より望ましい観光のありかたを探求するための国際

学士院が、国際観光学アカデミーとして1988年に創設されていると前掲石森論文は伝える。この機関は、観光研究の学術振興と国際交流を図ることを目的とした権威あるアカデミーをめざすものであるといわれる。さらにはまた、『現代世界における観光現象を総合的に調査し、体系的に理論研究をしたうえで、応用を行うための国際的な観光学研究センターを日本に設立することが強く要請されている。国際観光学アカデミーのJ・ジャファリ会長（米ウィスコンシン大教授）も日本の国際的貢献に対する熱い期待を表明している。（以下略）』（前掲石森論文）と紹介されているように、観光の側自身が、これまでの観光現象についての問題を凝視し、それを克服していくために観光の現代的意義と責任の重要性を認識してその積極的展開をはかるべくアクションを始動させているのである。

われわれ博物館側もこれまで述べてきたように、余暇における観光比重量的な大きさとその飛躍的な拡大の傾向を重視するとともに、〈観光のもつ積極的な意義〉が博物館の志向するところと一致するものであることを再確認し、観光にたいして新しい博物館展開を研究・実践しなければならぬところに来ているのではなからうか。この課題は、「観光と博物館」の発展的関係論の深化はもとより、娯楽から教育へという連携を生みだすための非日常的な時間・空間における新鮮な驚きを体験させる教育演出論や、パフォーマンスによる博物館メッセージを伝達する演技論の研究・開発、さらには博物館の存在を身近に知らせるためのマス媒体を活用した積極的な広報・宣伝活動の一元化した展開なども含めて日本の博物館界全体がひとつになって取り組むべきすぐれて今日的なテーマであると考えられる。

観光においての時代を反映したビビッドな研究と実践が博物館にたいして新しい展開とテーマを与え、博物館における物と環境に関する着実な研究成果が、より望ましい観光のあり方を提示していくという関係が樹立されるならば、『観光と博物館』は生涯学習にとっても空気のように必要不可欠なものとなるであろうし、春の日の太陽のごとく温かく柔らかく人々を成長させて行く源にもなるであろう。〈自立した余暇社会〉はそのことを強く求めているのである。

それに応えていくためには、〈博物館の責任ある社会的貢献の源泉〉であるべき〈学芸分野〉の日常活動が、量的・質的に充実されていなければならないことは言うまでもない。

三筋壺

その造形と意味をめぐって

常滑市民俗資料館・学芸員 中野晴久

序

1988年の秋、常滑市民俗資料館は、特別企画として「末法の造形～三筋壺～」を開催した。その特別展のテーマとなった三筋壺とは、一般に器高30cm弱の中型の壺で肩部から下胴部にかけての器表に刻線が三段めぐらされたものとして認められている。考古学者・陶磁史家は、この種の壺を音で「さんきんこ」と呼び、愛好家は、しばしば訓読みで「みすじつぼ」あるいは略して「みすじ」などと呼称している。

三筋壺は、これまでの研究により、平安時代の末期から鎌倉時代の末期、南北朝期にかけての期間に知多地方の古窯で集中的に生産されたものであることが知られている。

知多半島では、平安時代の末期から南北朝時代にかけて、その丘陵部斜面に数千基ともいわれる大古窯群が形成され膨大な量の中世陶器が産出された。この知多地方の中世古窯群については、「知多古窯址群」「知多半島古窯跡群」のように窯の分布状態から命名された名称と「常滑古窯跡群」というように、その歴史が近世以後の常滑焼に継承されているという認識から付けられた名もある。とりわけ陶磁史、古美術の分野では知多の中世陶器に対し「古常滑」という呼称を用いることが多く、その歴史的系譜を重視する傾向が強い。

窯の分布を遺跡名に紐込むのは主として考古学関係の研究者であるが、この分野の人々は、中世前期を中心に知多半島の基部から先端部にわたり広範な分布をみせた古窯群が中世後期に至り急速に常滑地域に集中し、後の近世窯へと移行するという見方をとり、その間の断絶を一大画期と位置づけているといえよう。

知多半島の全域に分布する古窯群の規模について正確な数を認定することは、今日既に不可能となっている。1986、87年に愛知県教育委員会が実

施した分布調査では775基以上の窯が確認されている。しかし、この調査にもれた地点や地中において概数を把握する以外に手段のない事例も少なくない。更に過去の開発行為等により滅失した窯が相当数あることも間違いない。知多半島古窯址群の規模については千基を超える窯で構成されていたことは確実であるが、数千基あるいは一万基とまで推定数が示される総体を証明する方法は見出しえない。

千基をこえる知多の中世古窯では各種の甕^{かめ}や壺^{つぼ}、鉢、碗、小皿などの器物を中心に様々な陶器が生産されていたことは過去の発掘調査によって判明している。本論の主題である三筋壺は、その諸製品の中では、けして量産された器種ではない。短頸壺や長頸壺、広口壺、四耳壺といった壺類の中の一つに位置付けるべきであろう。しかし、その一方で三筋壺は他の器種とは異なり、「古常滑」を代表する製品としてシンボリックな性格付けがなされてきたのである。三筋壺イコール古常滑というような三筋壺に対する特別視は主として古美術、陶磁史レベルの視点から行なわれる傾向が強い。これに対し、考古学の方面からは、三筋壺の生産が知多地方に止まらず猿投東山窯や越前、渥美、丹波等の諸産地においても行なわれていることを次々に明らかにし、知多＝古常滑の三筋壺に関する特殊性を相対化する方向に研究が進展してきたとみられる。

本論は知多古窯址群の製品中において、ひととき多様な意味付けがなされてきた三筋壺及び三筋文系陶器に関し、その研究を跡づけ、その上で筆者なりのささやかな意味付けをも行なおうとするものである。

第一章 三筋文系陶器の研究史

第一節 三筋壺の出現

これまでの研究成果からみて知多古窯址群の三筋壺は、12世紀前半には生産が行われている。そして三筋文をもつ陶器類は、猿投東山窯において知多よりわずかながら古い段階に焼かれている可能性があることも知られている。その詳細は後述するとして、ここでは三筋壺が「三筋壺」という名で出現した点についてまず触れておきたい。

知多の古窯址群が本格的に研究され出したのは昭和20年代も後半に至ってからのことである。窯の組織的な分布調査と発掘という研究方法を採用することにより、研究水準はそれまでの先駆者の個別研究を飛躍的に前進させたといえよう。沢田由治氏を中心とした常滑古窯調査会の活動は、その意味で知多半島の中世古窯に対する本格的な研究の幕開けであったと位置づけることができる。小山富士夫氏の指導を受けた沢田氏の研究は、当初より考古学というより古陶磁研究という色彩が濃く、その傾向は年を経るごとに一層強くなり古常滑研究の第一人者として沢田氏は今日に至るのであるが、「三筋壺」という名称は、他ならぬこの沢田氏等の研究過程で登場してくるのである。

沢田氏の初期の研究成果は、昭和34年に刊行された「世界陶磁全集、第2巻」（河出書房）に収められた「平安-室町の常滑」にまとめられている。この本におかれた三筋壺の図版に付けられた名称は「灰釉刻文壺」あるいは「灰釉壺」であって「三筋壺」という名称は前面に出てきてはいない。三筋壺という名が登場するのは図版解説や挿図のレベルである。氏は、高さ8寸、胴径6寸、口径4寸、底径3寸ほどの古常滑の壺には、「殆どのものが胴部に三筋の陰線が彫られているので三筋壺と称している。」と記し、「中には四筋のもの筋のないもの等があり」とそのバラエティーにも言及している。

そしてさらに図版解説において沢田氏は「古常滑は経塚からの出土例が多く、次いで神社、墳墓、寺院である。曳かれている三筋の線もこれらの用途に当る意味を持っているもので恐らくは敬三宝、三界、天地人等の何れかの表現であろう。」とし、三筋壺の用途とその文様の意味解釈にまで進んでいるのである。

昭和34年という中世古窯研究の確立期において、すでに三筋壺は、その名称を与えられ、標準的な規格と三筋文（時には無筋、四筋、五筋の場合がある。）をもつこと、そしてその文様には宗教的意味付けがなされていた可能性が高く、主として宗教関係遺跡で消費されていること等々の属性が付与されていたのである。そして、この三筋壺に対する規定は、細部のいくつかの問題を除けば、そのまま今日にあっても通用するほどに画期的な業績であったといえよう。そして沢田氏を中心とする研究会会員諸氏の活動を通じて三筋壺は他の壺から差異化され、個有の意味を担って識別されることになったわけである。

縄文土器が縄文人によって命名された名称ではなく、弥生土器が弥生人の語ではないように三筋壺もそれを作り、使った人々の用いた名ではない。考古学やそれに類する学問の対象は、常に

このような語と物との関係の断絶を内に含んでおり、研究者はその研究の第一歩として、かつて分節されていたところの言葉とは無関係に現在の研究者の認識レベルに基づいた新たな分節化を強いられているのである。しかし、その研究者の分節は、あくまでその時点の研究者のものであって過去の人々の認識体系と合致しているという保証はまったくないのである。とりわけ歴史系の研究に顕著に認められる生産品に現われた通時的变化に対する鋭敏な反応は、後世の研究者によってのみ為しうるところであって生産者自身において時間的变化が自覚されていたのはごく限られた範囲であったと考えられる。

三筋壺の研究の基盤をつくった沢田氏は考古学、歴史学の分野に属さず、古陶磁研究、陶芸研究の領域において、その研究を進められており、製品の時間的变化にはさほど鋭敏な反応を示さず、生産時に付与された造形の意味とその特殊性の復元に力点があったと察することができる。このようにして、知多の三筋壺は、特異な性格を有する製品として20世紀後半に再認識されたのである。

研究史上、「三筋壺」の初見は、沢田氏による昭和28年刊の『陶説』7、「古常滑窯址調査」である。また赤塚幹也氏は、昭和10年の『陶器構座 第6巻』『陶器製作史概説』（雄山閣）で今宮神社の三筋壺を紹介しているが、その名称は「常滑壺」である。

第二節 三筋壺の考古学的研究

[杉崎 章]

杉崎 章氏は昭和29年の現、東海市^{やしroyama}社山古窯の発掘調査以来、今日に至るまで知多半島の中世古窯を精力的に調査され、その成果は「常滑の窯」（S45, 学生社）「常滑窯業誌」（S49, 常滑市）「常滑窯—その歴史と民俗—」（S63, 名著出版）の三冊と各種の調査報告書によって公表されている。

昭和43年の「常滑の窯」で杉崎氏は、三筋壺を知多半島の窯に固有の器種であると位置付け、考古学研究者に相応しく年代ごとに移りかわるその姿を叙述されている。氏は、まず赤塚幹也氏によって報告され知多の古窯の操業時期を知る上での重要な資料である京都今宮神社出土とされる三筋壺を壺の上に立てられていた四方仏石の刻銘から天治二年（1125）までに製作されたものとして捉え、第一形式に設定されている。そして、その後の変化については、肩部が張って下胴部が細くひきしまった形と三本のするどい刻線を特徴とする（第一形式）から、肩の張りがなだらかとなり、胴部全体にまる味がみられ、とくに口縁部が萎縮した傾向をみせる（社山様式12C～13C）ようになり、胴部にほどこされた刻線のするどさがうすれ、肩部の張りが弱くなっている例が多くなる（第二形式13C）と指摘し、更に三筋壺の伝統は第三型式期（南北朝期14C）の肩に一条の刻線をもった壺として引きつがれたという見解が示されているのである。

昭和49年の「常滑窯業誌」においても杉崎氏は、43年当時の三筋壺観をそのまま踏襲されているのであるが、この段階で三筋文解釈と三筋壺の役割に新たな見解を提起されている。氏がここで示した考えは、知多の壺という器種は、携帯用のものであり、非宗教的、実用的製品であるこ

と。従って、その三筋文も木製桶のタガを装飾化したものであり、強い機能を与えるとすれば量目を示すものであろうという解釈である。この見解は先の沢田由治氏による宗教の影響に相違ないとする説と対立するものである。また三筋壺の経塚でのあり方について三筋壺を経筒に、大形甕かめを外筒に同定する（P14）のも本書で注目されるところである。

昭和63年の「常滑窯—その歴史と民俗—」では論述の中心が中世末から近世、近代の常滑窯に移っており知多の古窯については、ごく限られた紙数が与えられたのみであるが、ここで杉崎氏は、三筋壺の知多における固有性について新たな事例から渥美窯や越前窯でも三筋壺が生産されていたことを認めつつ、そうした事例があったとしても、その生産量からみて三筋壺は知多古窯の代表製品であることを主張されている。

[榑崎彰一]

榑崎彰一氏の知多地方におけるフィールドワークは、昭和30年代の愛知用水関係の調査にかぎられているが、その集約は、昭和42年の「日本の考古学VI」（河出書房新社）と考えられる。しかし本書の中では三筋壺に関する記述は、わずかに今宮神社出土の例についてみられるのみで今宮例が知多古窯の開始年代を示す指標として扱われているにすぎない。

しかし、榑崎氏の三筋壺に対する視点は、昭和40年代末から50年代初頭に刊行された「日本の陶磁・古代中世篇」（中央公論社）において大きな変化をみせている。氏は、このシリーズの2（S50）、3（S49）、4（S51）において三筋壺に限らず三筋文で器面を画する一群の中世陶器を三筋文系陶器として一括して把握し、その産地を知多に限らず猿投窯、越前窯、渥美窯等にも求め、更にその起源を中国宗代の白磁四耳壺に措定し猿投窯や美濃須恵窯において最初に白磁壺の摸倣が行なわれた後に各窯へと伝播したという想定を示されたのである。

榑崎氏は本書4巻において三筋文をもった陶器を他の雑器とは異なる高級品として性格づけているのであるが杉崎氏同様、沢田由治氏の宗教的文様説（五輪思想説・後述）には対立する見解が述べられている。従って、この段階では榑崎氏の見解は、中国宗代の白磁四耳壺を原型とし、磁州窯系の梅瓶類にみられる平行沈線文の影響によって猿投窯や美濃須恵窯で成立した三筋文系陶器が省略や独自の展開をみせつつ各中世窯へと伝播したというものである。また本書4巻には古常滑の編年図が付されており、5段階の三筋壺の編年も示されているが、その後の氏の編年からみても、この年代観は十分に検討されたものとは思われない。

昭和53年に発表された「初期中世陶における三筋文の系譜」『名古屋大学文学部研究論集（史学）』は、榑崎氏の三筋文系陶器研究の一つの到達点として高く評価されるものである。ここで氏は、先の「日本の陶磁・古代中世篇」で提起した三筋文の系譜を資料を通しつつ論証し、洗練された編年案を示している。

まず三筋文系陶器の発生については、猿投窯での中国陶磁の摸倣に求め、猿投窯から三筋文系陶器の伝播した産地として常滑窯、渥美窯、塩狭間窯、（美濃須恵窯）、越前窯、丹波窯（京都緑釉陶産地）の7箇所を挙げている。

そして、三筋文系陶器の生産期間である11世紀末から13世紀中頃までを7期に区分している。この編年の指標として氏が示した櫛目文、複線文（広・狭）から単線文へ、という流れや三筋文の非定型から定型化へという動き、さらに三筋文の付される位置の変遷等も画期的であったといえよう。

しかし、本論文で注目されるのは、三筋文自体の成立と三筋文系陶器の成立との間に微妙な違いが認められる点である。氏は冒頭の研究史に関する記述において三筋文系陶器の発現の根拠を中国陶磁に求めると明記しているにもかかわらず、文中の「三筋文系陶器の諸例」にあげられた(ハ)白磁四耳壺に関する記述では、中世初期の四耳壺や三筋文壺の原型として、この白磁壺を位置付けるのみで、三筋文の原型は別にあると述べており、その具体的な例示はなされていない。

三筋文の原型に対する榑崎氏の見解は、1988年に愛知県陶磁資料館、五島美術館で開催された「日本陶磁絵巻—やきものに刻まれた絵画—」展の図録でようやく示されることになった。ここで氏が提示された三筋文の原型とは、木製筒形容器（典型例として「彩絵曲物^け筒」（東大寺伝来、MOA美術館蔵））にはめられた^{たが}箍である。榑崎氏は、三筋文系陶器の中で特に古い段階に属する壺、経筒外容器には突帯文を施したものが存在することを新たに指摘され、複線文、単線文等の沈線文は突帯文の省略形として位置付け、この突帯文と曲物の箍とをつなぐことで三筋文の祖型を遡ったのである。さらに氏は曲物と同様の箍状突帯が古式の銅製経筒にも見受けられることに触れ、金属器や陶器には本来箍の不用なことを理由に金属器の突帯もまた木製容器のそれを模したものとされている。

銅製経筒の突帯について「経塚遺宝」（1977、奈良国立博物館編）では、福岡県宅間経塚出土の永久三年銘経筒のように条線を縄紐状に象ったものがあることから木、竹製経筒における掛け紐の制が表現されたかもしれないという推定がなされており、榑崎氏の所論を補っている。

[赤羽一郎]

赤羽一郎氏は、昭和51年に刊行された「日本陶磁全集8、常滑渥美」（中央公論社）において三筋壺は^{かめ}大甕とともに知多古窯製品の代表器種であると規定し、水瓶、短頸壺、広口瓶などを含め特殊容器と呼ばれるべき製品という性格付けを行っている。氏は、三筋壺の生産時期を12世紀初頭から13世紀の中頃までとし、その編年においては12世紀後半から13世紀中葉の時期に複線文から単線文へと移行したと述べ、編年図は榑崎氏の53年のそれと一致をみせている。

赤羽氏は、また三筋文について、その意味については諸説あることを指摘しつつも、三筋文の意匠は、「11世紀後半に中国陶磁の影響を受けて白瓷に採用された装飾様式の系譜」に属すると推測されている。この見解は、猿投窯において受容され定着した中国陶磁の新しい傾向が常滑、渥美、越前、丹波等へ同心円的に波及したとする説で昭和50年代に榑崎氏によって提示されたものと符合している。しかし赤羽氏も三筋文の原型となる中国陶磁についての具体的な資料を示すまでには至っていないのである。

1983年(S58)出版の「常滑、陶芸の歴史と技法」（技報堂）で赤羽氏は、三筋文様の出現につ

いては初期山茶碗窯としての東山窯での現象として捉え、灰釉陶器産地としての猿投窯と東山窯との区分に新しい視点を導入しているが、他に大きな進展はなく、先の中国陶磁起源説も三筋壺に対するものではなく、四耳壺や三耳壺の成立を説明するための手段に用いられている。

また1984年（S59）の「常滑窯—中世窯の様相」（考古学ライブラリー23、ニューサイエンス社）においても赤羽氏の三筋壺に関する見解に新しい展開は認められない。しかし、この著書で注目されるのは、三筋壺をとりまく史的背景についての氏の指摘である。

平安末期から鎌倉初期の広口壺や三筋壺といった知多古窯の製品が多く経塚で用いられていることは研究者にとって周知の事柄であるが、氏はその経塚造営について「^{ひじり}聖」と呼ばれる遊行的性格をもった勸進僧が、その造営から経筒、外容器、随伴物等にいたるまで深く関与しており、それに対し、助言を与えていたことが推定できるとの説をとり、更に進んで経塚に必要な品物を携えて諸国を勸進して回った可能性にも言及されているのである。また経塚と深い関係にある天台系寺院の分布と経塚の立地する土地との深いつながりや熊野、浅間、白山といった修験に関わる神社境内での盛んな経塚造営との関係にも着眼し、知多古窯の製品流通が修験や勸進僧の宗教活動と密接に関っていたという重要な指摘もここで行われている。

以上、杉崎、榑崎、赤羽の三氏による研究は、考古学を主要な方法として三筋壺にアプローチしたものである。既述の諸論点の他にも成形技法や知多半島内の古窯で三筋壺を出土している窯の地域性等についての研究も為されている。以下の記述において必要に応じ各氏の見解を引くことにしたい。

第三節 三筋壺の陶磁史、美術史的研究

[沢田由治]

この分野の研究は、その大半が沢田由治氏によって担われてきた。沢田氏は三筋壺の命名者であり、今尚常滑陶芸史研究の第一人者である。第一節で紹介した通り昭和34年の「世界陶磁全集第2巻」において氏は、三筋壺類が平安末期から室町末期にかけて知多半島の窯で焼かれており、それらの壺が神社、経塚、墳墓から多く出土していることに触れ、三筋文も宗教的意味付けのされた文様であった可能性が高いとして「敬三宝」「三界」「天地人」等の何れかの表現であろうという見解を示されたのである。また、そのバラエティーとして三筋だけでなく無筋、四筋、五筋文の存在も指摘し、それらを三筋壺類に入れて区分することも既にこの段階で行なわれている。

その後、沢田氏は、昭和35年刊の「名古屋周辺の古陶」（東海古窯研究会編）において古常滑の中で第一番に三筋壺をとりあげ、その美の在り方を「多くのものが火前で焼かれていて、むらむらと火影があり、ザングリとした土味にグリーンの灰釉が心憎いまでに景色を添えて垂涎措く能はざるものがある。」と表現し、所属年代を平安末から鎌倉末にあてている。更に三段の蔭線は、時代の降るにつれ四筋のもの、二筋のもの、無筋のものも見られるようになると説いている。この推移は、沢田氏の強固な三筋壺観を現わしているもので当初に固定的な三筋壺が現出し、時

代とともにその規範に乱れが生じたとする考え方と見受けられる。この点对照的なのは榎崎氏の53年論文における非定型から定型へという流れである。

また、この論文で重要なのは、沢田氏の三筋壺に関する最も特徴的な学説となる三筋文と空風火水地の五輪との関係が示されたことである。つまり、三筋の刻線は装飾文として他に例がないことと製作手段からも、その必要が見当たらないことを述べ「創生期に五輪表現、即、空風火水地の表現手段として意匠上に現はれて来たものではあるまいか。」という推論を展開されたのである。

先著において沢田氏は、三筋文の三という数に着目し、敬三宝、三界、天地人という三にまつわる仏教思想をその意味として提示されたのであるが、この段階に至って五という数に新しく三筋文の原理を見出したのである。五分割の説明としては、胴部が三筋文で四分され、さらに口頸部を独立した部分として数えることで壺は五要素に分割されるのである。

沢田氏の三筋壺＝五輪表現説は昭和48年に出版された「陶磁大系・第七巻、常滑越前」（平凡社）において一つの頂点に達する。氏は本書では三筋壺が古常滑特有のスタイルであること、多くが経塚の随伴物壺に用いられること、そして、三筋壺の製作年代が西暦1100年頃から鎌倉初期までであり、その後の鎌倉時代は無筋の壺となり室町時代初期まで、この壺が神社の御神体容器として用いられる例が多い点を挙げつつ三筋壺と五輪との関係を挙げている。三筋壺と五輪との関係については前出論文の説明と変っていないが本書では古常滑－五輪思想－北嶺仏教・修験道の三者が結びつけられている点に新たな展開を見ることができる。つまり、北嶺仏教・修験道は五輪思想がその根底にあり、古常滑の三筋壺類は北嶺仏教・修験道に関連する遺跡から多く出土する。ゆえに三筋壺には五輪思想が反映している可能性が高いということである。氏があげられた具体例は、「愛媛県松山市に近い天台宗廃寺址から発掘された三筋壺」であるが他にも比叡山の如法堂や京都花背山福田寺の周辺より出土している古常滑の壺、甕もこの説の論拠になっていると考えられる。氏が本書以来しばしば力説される考えとして古常滑の本質的な特徴とは、民衆用の一般用具ではなく、それらは貴族や宗教の用具として生産されたものであるという見解もこの段階で登場しており、その拠る所はやはり北嶺仏教と修験道である。

沢田氏の三筋壺、古常滑に関する所説は、その後も「陶磁大系7」で示された見解を踏襲しつつ昭和49年の「時代別古常滑名品図録」（光美術工芸）において集大成された感がある。多少繰り返しになるが、微妙な差違もあるので改めてその要点を記すと、三筋壺は古常滑だけのものであること、平安末期に経塚の随伴物壺として使われ鎌倉時代に入ると蔵骨器に使われることが多く鎌倉初期に姿を消すという製作期間、さらに三筋壺の出現する平安末期には修験道の宗教理念に「五輪思想」があり、三筋壺は宗教関連の用具として使われていることから、その意匠に五輪思想が反映している。また平安末期の製品には五輪思想が明瞭に現われ首許の尖角がはっきりと作られ胴の三筋も力強く引かれているが鎌倉時代には五輪思想も曖昧になり、二筋や四筋のものが現われ筋のタッチも弱くなっていくという編年が示されている。

[矢部良明]

昭和61年に発刊された「日本の美術 No.236, 陶磁(中世編)」(至文堂)では矢部良明氏が日本の中世陶磁を論ずる中で常滑の三筋壺に簡略な説明を加えている。氏は、そこで三筋文を中国陶磁の弦文の転化であろうと述べている。

[荒川正明]

昭和63年に発表された荒川正明氏の論文「中世陶器における刻画文の系譜とその特質」(美術史第123冊)は三筋壺が中心ではないが、それを内包する中世陶器の刻画文をテーマとして美術史的視点に立って、その位置付けを行っている。ここで荒川氏は猿投、渥美、常滑、越前などの各生産地に認められる三筋文系陶器の文様を金属器から影響されたものという想定を提起されている。そして、その論拠として氏が挙げているのは①経塚より出土する銅製経筒などに突帯や沈線による三筋文が認められること、②三筋文系陶器が出現する平安末期という時期には、経塚に埋納する仏具は多く青銅などの金属で作られているが素材として腐敗しやすいため不朽性を有する焼き物で金属器を代用することがあり、実際に陶製の経筒や花瓶、香炉、六器、仏像などが作られていること、③常滑窯の三筋文壺は多くが経塚で使用されており、三筋文と経塚との深い関連性が金属器同様に見受けられること、の三点である。

一方、金属器等の意匠が中世陶器生産の場に入り込んだ史的背景について荒川氏は①11世紀中葉以降の院政期に活発化する六勝寺を中心とする造寺造物事業に伴って東海諸窯で新しく始まる瓦の受注生産に着目している。

東山窯や知多窯といった、それまで瓦生産の伝統をもっていない地域で突如として整美な文様瓦が生産されている現象は、そこに中央からの技術導入があったことをうかがわせており、その出現のしかたは、三筋文を含む刻画文のそれと類似しており、両者の間に何らかの因果関係が想定しうること、②同じく11世紀以降、末法思想の普及により全国的に経塚造営が盛んになり、経塚へ埋納する特殊器種生産が窯業地で開始されること。その具体例は、猿投窯での先述の金属器のコピー生産や渥美窯で生産された仏像の光背や台座などである。とりわけ後者の見事な造形には陶工だけではなく仏師等の協力が不可欠であったとし、当時の陶工集団の中には窯業とは異なる技術者が入り込んで新しい展開を生み出したという二点が論じられている。

荒川氏の本論文における主要テーマは、三筋文にはなく、より広い意味での刻画文におかれている。そして、その解釈にあっては絵画資料や薪絵、和鏡などの工芸資料に現われた各種の装飾表現との類似性に着眼し、12世紀代を中心とする中世陶器の文様に院政期の貴族層の美意識が採り入れられていたことを明示するという極めて示唆に富んだものである。しかし、ここでは三筋文に関する部分のみを抽出して紹介することにし、改めて所論を検討する機会にその細部にまで及ぶことにしたい。

第四節 研究史小結

以上、中世陶器の一種である三筋壺及び、それに類する三筋文系陶器に関して発表された、考古学、陶磁、美術史学の研究者のテキストを概観したのであるが、以下に各氏の論点を整理し、小結としたい。

①三筋文の起源

沢田由治 敬三宝、三界、天地人→五輪表現、五輪思想

杉崎 章 木製桶たがの箍

榎崎彰一 中国陶磁、宋代白磁壺→木製曲物たがの箍

赤羽一郎 中国陶磁→(?)

矢部良明 中国陶磁の弦文

荒川正明 金属器、銅製経筒の文様

②三筋壺の壺形態の起源

榎崎彰一 宋代白磁壺

③三筋壺の性格

沢田由治 宗教用品

杉崎 章 日常品(?)

榎崎彰一 }
赤羽一郎 } 特殊品
荒川正明 }

④三筋壺の産地

沢田由治 古常滑固有

他氏 中世窯一般 量的に知多窯が突出

⑤三筋壺成立のプロセス

沢田由治 常滑にて成立

榎崎彰一 }
赤羽一郎 } 猿投窯→常滑窯(知多窯) その他の中世窯

⑥三筋壺の生産時期

沢田由治 平安末～鎌倉末→西暦1100年～鎌倉初期(以後、無筋壺)

杉崎 章 平安末～鎌倉(以後、一条刻線文へ)

榎崎彰一 }
赤羽一郎 } 平安末12世紀初頭～鎌倉13世紀中頃

第二章 三筋文系陶器の研究

第一節 三筋壺の概念と分類

研究史的にみると三筋壺は知多古窯において発見され命名された体部に三条の沈線文を有する中型の平安末から鎌倉期に生産された壺であり、器種の多様性のうちに四筋、三筋、五筋文をふくみ、さらに拡大解釈すれば無筋、一筋をも包含するものであった。後に知多以外の中世窯においても、その存在が確認されるにつれ知多の中世窯の特産品という位置から中世前期の生産品としてより普遍性をもった器種へと推移したのである。対象を知多古窯出土品に限定して捉えた場合、三筋文を有する器種は壺類に限られており、壺の形態も鎌倉後半期に出現する玉縁状の口縁部をもち肩部に一条ないし二条の沈線をもつ壺を範疇から除けば強い整一性を示している。例外的に大形の壺や環耳、高台を有するものも存在するが、その個体数は極限られたものである。しかし、その対象を全国的に拡げてみた場合、三筋文を有する器種は格段に増える様相を見せるのである。

榑崎彰一氏によって示された三筋文系陶器という概念は、全国的に三筋壺とその関連製品を把握しようとした場合、必然的に生み出されたものといえよう。そして三筋壺から三筋文系陶器へと概念を拡張することによって三筋壺は、東山窯産の刻画文壺や陶製経筒、渥美窯産の袈裟襷文壺や蓮弁文壺等と同列の器種として扱うことが考古学上では一般化したのである。

三筋壺が担っていた特殊性やその生成過程を知る上では、三筋壺に類する製品のあり方を検討することが不可欠な作業である。とりわけ三筋文を有する壺以外の製品は三筋文の意味を探るための貴重な手掛りを内包していると考えられる。従って以下に産地毎の三筋文系陶器を分類し、それぞれの特色をみることにしたい。

[東山窯(猿投窯)]

三筋文手付水注(頸部二筋、体部二筋) H-61号窯、瓦併焼

三筋文牡丹文壺(大型) H-105号窯

三筋文蔓唐草文壺(標準型) 八事裏山D窯、瓦併焼

三筋文花瓶(複線、頸部、体部、脚台部に各一筋) H-101号窯、瓦併焼

三筋文火舎香炉(蓋に三筋文) H-101号窯

三筋文四耳壺 { 複線二筋文、H-101号窯
 { 突帯文 H-101号窯
(標準型) { 複線三筋文、高台付

三筋文壺 { 櫛目三筋文 (標準型)
 複線三筋文 { 大型
 標準型 { 高台付、H-61号窯
 無高台
 複線二筋文 (高台付?) H-101号窯

陶製経筒外容器 { 複線三筋文牡丹文
 複線三筋文、H-101号窯他

[渥美窯]

陶製経筒、外容器 { 刻線袈裟襷文、四足付
 刻線袈裟襷文、突帯刻線文 (熊野本宮経塚)
 (無文・刻字例は除く) { 複線三筋文
 突帯文
 複線文、牡丹文 (複線文は蓋部のみ)

二筋秋草文広口瓶 (大型) 頸部突帯付

芦鷺文三耳壺 (大型)

袈裟襷文壺 { 大型
 標準型 { 三耳付
 無耳

蓮弁文広口瓶 { 頸部突帯付 (大型)
 肩部突帯付 (大型)
 無突帯 (大型)

蓮弁文壺 { 大型
 標準型

単線三筋文 (二筋文) 刻文壺、(標準型)

蓮弁文水瓶

※標準型は知多の三筋壺の規格と同程度という意。

檜崎氏編年図の小形壺に同じ。

[越前窯]

| | | |
|-----|---|-----------|
| 三筋壺 | { | 複線文 (標準型) |
| | | 単線文 (標準型) |

[丹波窯]

三筋文壺 複線文

※三筋文を含まない刻画文壺は三本峠窯より多数出土。

[知多窯 (常滑窯)]

| | | | | | | |
|------|---|-------------|--|---|-----------|----------------|
| 三筋文壺 | { | 櫛目五筋文 (標準型) | | | | |
| | | 櫛目三筋文 (標準型) | | | | |
| | | 複線三筋文 | | { | 大型 { | 四耳高台付 無耳無高台 |
| | | | | | 標準型 | |
| | | 複線四筋文 (標準型) | | { | 三耳付 無耳 | |
| | | 単線三筋文 (標準型) | | | | |
| | | 単線四筋文 (標準型) | | | | |
| | | 単線二筋文 (標準型) | | | | |

| | | |
|-----------|---|----------------------|
| 短頸壺 水瓶 | { | 檜崎論文に掲載。刻線か篋削り痕か不明瞭。 |
|-----------|---|----------------------|

三筋文系陶器を産地毎に類別することで、それぞれの産地には、かなり特色が存在することを
知ることが可能である。つまり、東山窯 (猿投窯) においては、三筋文を有する器種の豊富さと
文様意匠の多様性、複合性が顕著であり、さらに瓦との併焼も見逃すことができない。

一方、渥美窯では大型の壺、瓶類と袈裟襷文の系統に優位性を認めることができ経筒、経筒外
容器の多様性も特色としてあげることができる。そして逆に三筋文自体の少なさも指摘しうる。
現在、渥美の三筋壺とされているものの中にも二筋文と刻文の組み合わせという渥美的色彩の濃く
でている例があり (図4-21)、渥美窯では三筋文との類縁性をもちながらも異質な文様系統を
多く含んでいるとみることができる。この点で、いわゆる秋草文壺や芦鷺文壺といった優美な刻
画文や仏像の光背、台座さらに五輪塔の生産など渥美の特殊品生産には独自性を感じさせるもの
が少なくない。

渥美窯とは対照的に知多窯では三筋文壺の多様なあり方が注目される。知多窯では三筋文系陶

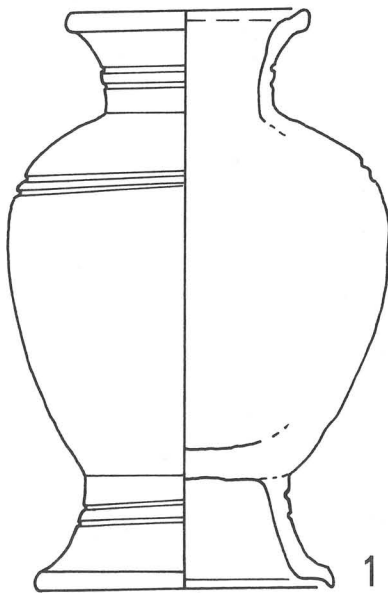
器に含まれる三筋文壺以外の器種の生産をほとんど行っておらず、三筋壺が突出しているのである。この点では、この器種の生産量について杉崎氏が指摘されているように他産地を圧するほどであり、知多窯が三筋壺の特産地であるとする見方も過大評価とはいいがたい。さらに知多窯の三筋文壺の多様性についても検討を加えるとすれば、現在確認する100点あまりの三筋壺のうち大型品は筆者の知るところでわずかに2例のみであり、高台を有する例がこの大型品の2例のうちの1例のみである。更に耳をつけた例は大型高台付例を含めて4例だけで特殊な例とすることができる。

従って知多窯の三筋文壺は三筋文の櫛目文、複線文、単線文といった施文具の多様性と五筋文、四筋文、三筋文、二筋文といった施文部分にみられる変化であって他の要素は均質的であるといえよう。このような三筋文系陶器のあり方は、例えば東山窯のように三筋文と刻画文を組み合わせたり、耳や高台をつけたり、突帯文を施したりする多様性とは性質が異なっているとみるべきであろう。

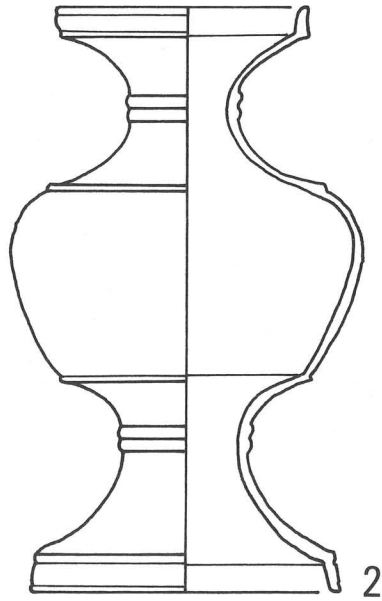
越前窯、丹波窯については、現在のところ三筋文系陶器の検出例が少なく、それぞれの特色を抽出する段階には至っていない。

第二節 三筋文系陶器の出自と形態の原型

三筋文を有する中世陶器のうち東山G-101号窯から出土している花瓶（挿図1-1）は、瓶部の形状に多少違いがあるが槇尾山経塚（大阪府和泉市）花背別所第一経塚（京都市左京区、福田寺）那智経塚（和歌山県東牟婁郡勝浦町、青岸渡寺）稲荷山経塚（京都市伏見区深草町）などより出土している金銅花瓶（挿図1-2）と緊密な関連性を示している。ただし、金銅花瓶の方



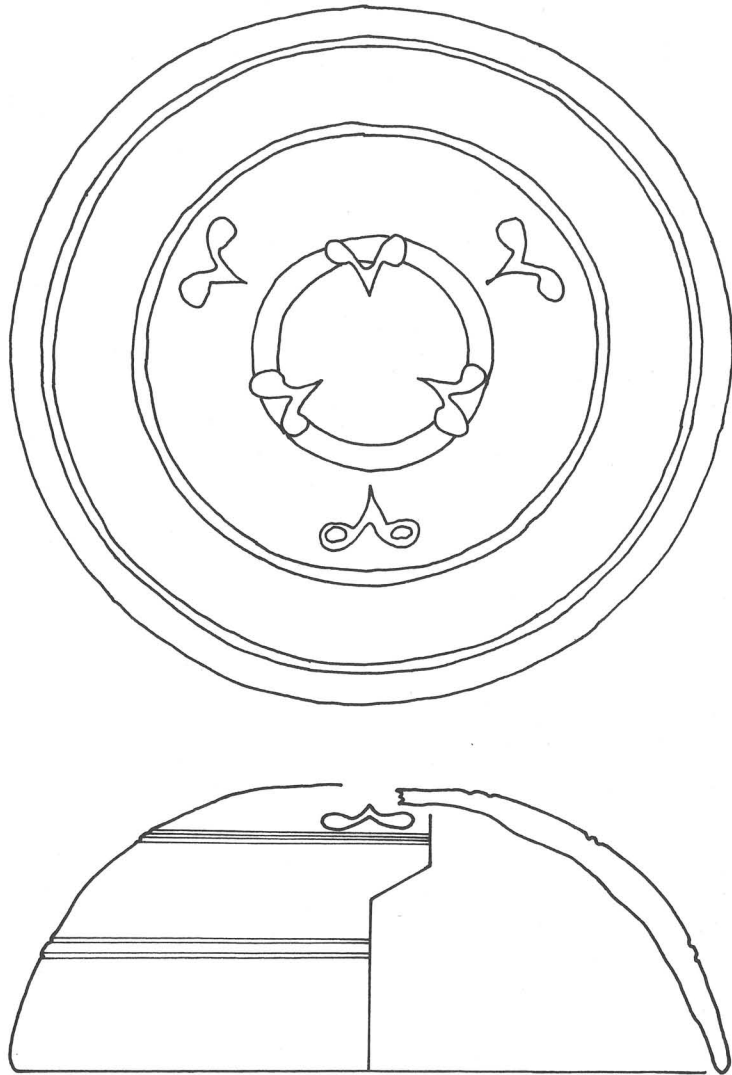
挿図1 1. 東山G-101号窯出土花瓶



2. 槇尾山経塚出土、金銅花瓶

は頸部、肩部、脚台部に突線をめぐらせているのに対し、東山の陶製品の方は複線の刻線文でその意匠を表している。

花瓶と同じ窯から出土している火舎香炉の蓋（挿図2）についても鈕部を欠いているが花瓶と同じように那智経塚、花背別所第一経塚、伝白浜経塚（和歌山県西牟婁郡白浜町）などの出土品中に酷似する金銅製品が出土している。金銅火舎香炉の蓋は三段に盛り上げた形で、その境に一条の凸線がめぐり宝珠鈕の鈕座には突線が付されている。しかし、陶製品は線文がいずれも複線の刻線文になっている。この文様の転化は花瓶のそれと軌を一にしている。また花瓶、火舎香炉に六器を加えると密教法具の中の四面器に相当する。



挿図2 東山G-101号窯出土、香炉の蓋部

陶器の特徴の一つに、その原料である粘土の可塑性をいかして様々な形象を摸写するという点があげられる。人物や動物等の塑像から塔や家屋等の建築物にいたるまで陶器はその歴史の中で様々な形を器物に限らず摸してきたのである。東海地方の陶器生産史をみても平安期に中国陶磁や金属器の摸倣志向は顕著であった。平安末期という中世窯業の開始期については、平安期のように金属器と陶器との関連性が強く指摘されることは従来なかったのであるが荒川正明氏は三筋文の出自に関連して、その点を新たに提起されたのである。花瓶、火舎香炉の先にみたあり方は、荒川氏の見解に従ったものであるが、他に東山H-61号窯出土の手付四筋文水瓶も、その形状からみて金属製仏器にその祖形を辿れそうであるが、今のところ明瞭な形で示すことはできない。

経筒及び経筒外容器についても荒川氏は銅製経筒との関連を重視し、榑崎氏も角度は違うが、その関係を認めている。しかし、この器種の出自については花瓶や火舎香炉ほどに直接的ではないと考えられる。

まず、その経塚における使われ方において銅製経筒は直接容器であるのに対し、陶製品は直接容器もないわけではないが、その多くは銅製経筒をその中に納める外容器であるものが少なくない。しかし、形態的にみれば円筒形の器部と宝珠鈕をもつ蓋という組み合わせは、荒川氏の指摘通り銅製経筒の一種と深くかかわっていることは確かであろう。そして、この種の銅製経筒にめぐらされる突帯や凹線が陶製品では刻線の複線文であることは、銅製品から陶製品へと移る過程での文様の転化として先の花瓶や香炉の事例から一般的な傾向とみることができる。

しかし、その一方で銅製経筒の形態は円筒形を基本としながらも塔形や六角柱形、八角柱形のものもあり、器部の突帯をもたないものもけして少なくない。文様についても十羅刹女の図像が刻された例はあるが東山窯の外容器にみられるような牡丹唐草文や蔦唐草文を描いた例は管見に触れていない。また施文法も十羅刹女の図像は三筋文に類似する横線刻文帯を無視する形で描かれているのに対し、牡丹文や蔦唐草文は三筋文によって区画された文様帯に収められており文様構成に大きな違いが認められる。また渥美の袈裟襷文四足外容器（挿図5-1）などは、その祖形を金属器とは別に求めるべきであろう。この点については文様に関する検討を行う別の個所で改めて扱うことにする。

以上のようにみれば陶製経筒、経筒外容器については、ある種の銅製経筒の影響を強く受けながらも、その直接的な摸倣ではなく別な要素が入り込んで独自な変化がもたらされていたと捉えるべきであろう。

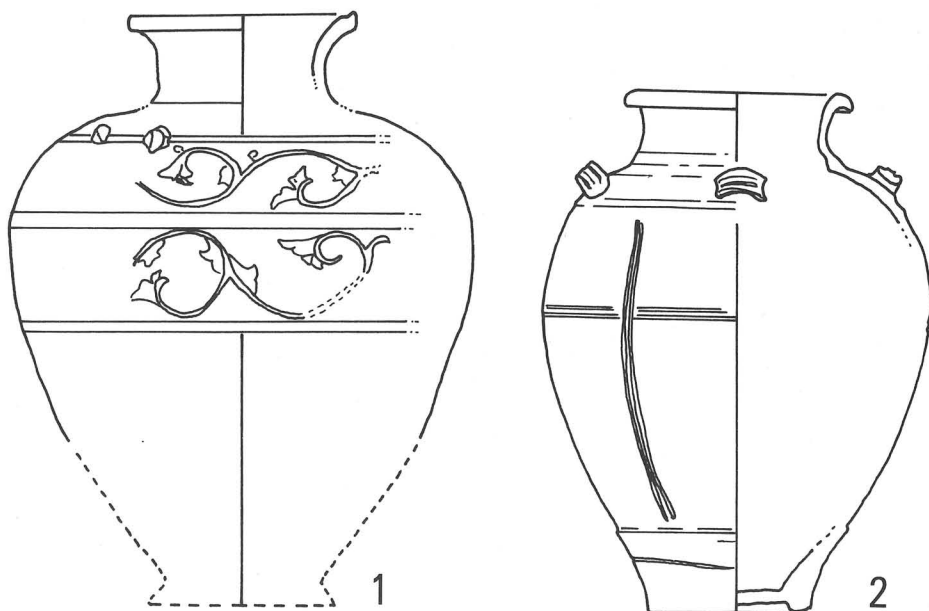
三筋文壺には大型と標準型があり、それぞれに耳を付したものと無耳のもの、高台をもつものと無高台のものがあり、さらに三筋文のみのもものと三筋文に刻画文を加えたものといった違いがあり、全体を一例に論ずることは難しい。このうちで標準型で耳と高台を有する例については、かつて榑崎、赤羽両氏が指摘されたように中国宋代の白磁壺（挿図3-2）に形態的に近似しており、その関連性は充分認められる。三筋文を別にすれば、この種の四耳壺は平安末期に至って新たに東海地方の諸窯で登場してくる器種であり、この時期に新たに日本にもたらされた中国陶

磁は、わが国の陶磁生産に大きな影響を与えているのである。平安期の灰釉陶器生産者は越州窯系陶磁への志向を明らかに有していたが、この時期にその方向を変えてくることは四耳壺だけに認められるのではなく、柴垣勇夫氏によって指摘された北宋後半期の白磁碗を写した碗の存在からも認められるところである。この白磁碗写しは瀬戸、東山、知多、西三河の初期山茶碗窯で認められている。ただし、四耳壺に三筋文を付したものについては、楢崎氏が三筋文の原型は、この種の四耳壺の他にあるとし、赤羽氏もまた東山窯の四耳壺の成立にかぎって、この白磁壺に言及しているように、この白磁四耳壺と三筋文とは無関係とすべきであろう。

一方、高台や耳をもたない三筋文壺や大型の三筋文壺、大型の耳付高台付三筋文壺、さらに渥美窯の各種刻文壺については上述の標準型四耳高台付の三筋文壺とは、系譜の違いや二次的な要素を考慮する必要があると考えられる。

知多古窯で多く生産された高台や耳を伴わない標準サイズの三筋文壺の器形については、今のところ白磁四耳壺の耳と高台を省略した形態として位置づける以外に妥当な仮説を立てることは困難である。なかでも越前窯の三筋壺（図4-19）にみられる口縁部の形状は白磁四耳壺との共通性を示しており白磁四耳壺の省略形説を裏付けている。

大型の三筋文壺については、とりあえず標準型の大型化したものとして捉えるのが適切かと思われるが知多の大型の縦形耳、高台をもった三筋文壺（図5-26）や渥美の芦鷺文壺や袈裟襷文壺などは知多や渥美の中世窯創業期に登場してくる広口壺や大型化した短頸壺との関連性の方が白磁壺より強く感じられる。



挿図3 1. 八事裏山D窯出土、蔓唐草文四耳壺

2. 白磁四耳壺

第三節 三筋文の出自と壺への転移

三筋文の出自のについての学説は、中国陶磁由来説、木製曲物の^{たが}籬由来説、金属器の装飾由来説、五輪反映説の四種が示されていることは既にみた通りである。

このうち中国陶磁由来説については榑崎、赤羽両氏が前説を撤回し、矢部氏一人が中国陶磁の弦文との関連性をかすかに述べているのみである。壺の体部をめぐる弦文には、たしかに三筋文と共通する点があり、完全に否定し切ることは危険であるが三筋文は施文の位置にも一定の規則性が認められるなど弦文とは、やや性格を異にするものと考えたい。

次に木製曲物の^{たが}籬の転移という見方についても榑崎氏の実例を提示しつつ為された論説には、かなり説得力がある。文様の機能論的側面からの言及についても考古学的解釈法としてある程度は評価されるべきものといえよう。氏の原型説は、また陶製品に限らず銅製経筒の突帯の起源も^{たが}籬に由来するものとする点で三筋文系文様全体の始源を説いたものと理解しうる。こうした榑崎氏の三筋文の起源説について筆者は明瞭な対論を提示しうるほどの力量を持ち合せてはいないが、二・三の疑問点があり、それゆえに榑崎説には拠らず別の可能性を探ってみたいと考えるが、以下にその疑念を列記してみたい。

①三筋文系文様を施された製品は経筒、外容器に限らず花瓶、香炉、手付水瓶等が含まれており、これらの器種の文様と^{たが}籬との関連性は認め難いように思われる。

②三筋文を有する陶製品の多くが経塚と密接な関係を保っているのに対し、木製品と経塚との間には、それほどの関連を見出し難いように思われる。現在知られている木製経筒は竹製経筒と同じく、ごく稀な存在である。一方、銅製経筒の中には先述の通り、突帯を有しない円筒部の例も多くあり、木製曲物の^{たが}籬から一元的に陶製品の三筋文や銅製品の突帯文を説明することは多少無理があるのではなからうか。銅製経筒研究の側からは、その突帯の起源を木、竹製経筒における掛け紐の制に求めようとする見解もあるが宅間経塚出土の永久三年銘経筒例のように紐の形を具象的に象ったものを他の突帯と同例に扱うことには多少疑問が残る。

また事柄は末梢的にはなるが、陶製品が金属器を摸することは古代以来頻繁に行われてきたことは定説化しつつあるのに対し、木製品と陶製品との接点は、けて多くはない。平安末期の陶製品への三筋文の急速な普及を説明する上で両者の接点をどの辺に見出すことが可能であろうか。

③装飾の発生を何によって説明するかという問題は極めて重要な問題であるが考古学では、しばしば機能論的にこのテーマを処理してきた。たしかに実用性から装飾性へと転じる事例が少ないのも事実であり、その方法の有効性は過少評価されるべきではないが、宗教用具等における装飾にはより複雑な意味が内在していることが容易に推測できるところであり、機能論の限界も知るべきであろう。^{たが}籬という補強具が刻線文に転じた場合、陶製品では、そこが弱点となり焼成時、使用時において破損の虞れが増すことは焼成失敗例などからも認められるところである。このような意味の逆転現象は「用」→「装」的パラダイムの上で解釈するだけでは決して充分とはいえないように思われる。

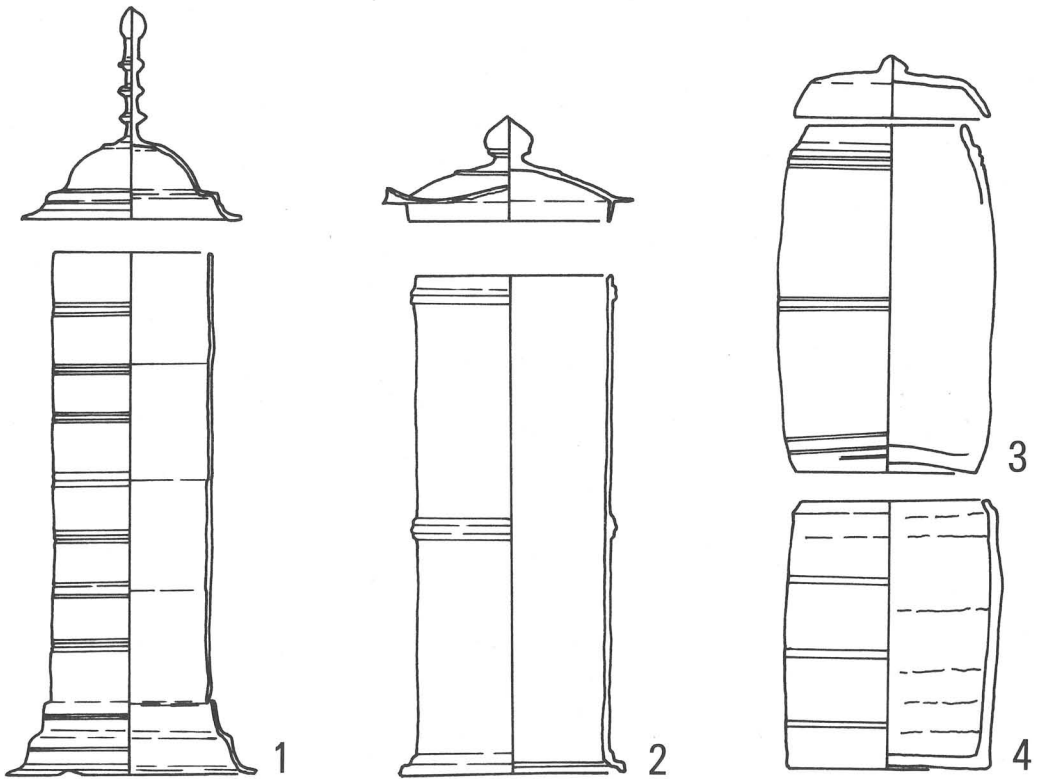
沢田由治氏によって主張されている五輪反映説については、考古学者側からは反発と形容する

に相応しいほどの反論が為されている。

たしかにこの説によって個別具体例を解釈することは不可能と考えられる。氏は三筋文→五筋文、四筋文、二筋文という仮定の上に立って、その五輪表現の変容を説かれているが考古学的知見よりすれば三筋文→二筋文という推移は描けても五筋文、四筋文の存在を沢田氏の五輪思想反映説で捉えることはできず、この説は有効性を失ったかにみえる。しかし、筆者は、ここで五輪思想、五輪塔造形の反映とする説を塔造形と読み替えることでその延命をはかってみたい。

銅製経筒の研究においては、円筒の側面に条線をめぐらす有節円筒に限らず、他の経容器についても「塔」「宝塔」と銘文に表現された事例がある。そして、その傘蓋上に相輪鈕や宝珠鈕を具えた形の経筒からみても埋経容器の形制が經典納置の法舍利塔に基づくものであったという見解が示されている。（「経塚遺宝」P389）

また経塚出土品中には、石峯寺経塚出土の瓦製五輪塔や那智経塚出土の銭弘俶八万四千塔、鞍馬寺経塚の鉄宝塔や石宝塔、銅宝塔等があり、宝塔を象った経容器も存在している。これらの事例は経塚、経容器と塔との極めて密接な関連性を物語っているといえよう。そして塔に三筋文は存在しないながら、層を為す造形である点に何らかの共通点は見出しうると考えたい。三筋文系陶器はやはり経塚との深いつながりが存在するのである。



挿図4 1. 2. 銅鑄製経筒

3. 4. 陶製三筋文経筒

荒川正明氏によって示された金属器の装飾の陶器への転移という視点は、上記の銅製経筒と三筋文陶器との塔のイメージを通じての接点とも関連して魅力的である。前節でみたように銅製花瓶や火舎香炉は、その形態のみならず装飾においても、わずかに変容しつつ陶製品へと転移していたのである。銅製経筒の陶製品への転化は、上記二種ほどに直接的ではないが陶製品の三筋文と有節円筒をもつグループの間には、とりわけ共通性を認めることができよう。問題は三筋文壺と銅製経筒との関係である。榎崎氏は1988年の論考において木製曲物の五段ある籬たがのうち上下二本分が省略され中央の三本のみが壺の装飾として導入されたとする見解を示されているが、三筋文を銅製経筒に由来するという荒川説に従えば省略という推測を加えずにその文様の転移を説明しうるのである。そして銅製経筒の文様が突帯であって陶製品が刻線文となっていることについては花瓶、香炉でも認められた転換である。しかし、経筒→経筒・外容器ではなく経筒→壺の方には、まだ相違点があるのである。それは突帯の配される位置と壺の刻線の配置にみられる違いである。銅製経筒の突帯は多くは筒部の蓋受け下部と中央部、そして基部に施されている。これに対し陶製経筒の三筋文の配置は、銅製品のそれを忠実に写したのもみられるが、中には上部の文様がより下方へにさがり、最下部の文様がより上方へあがった位置に配されている例も認められるのである。(挿図4-4) 従って銅製品から陶製品へと摸倣される段階で経筒に関しては突帯から刻線という変化だけではなく、その文様配置にもある程度の変容を認めうると考えたい。そして、その変容の度合いは、経筒から壺へと移る過程でより大きなものになったと推測したい。そしてこのように仮定した場合、銅製経筒→陶製経筒(外容器)→三筋文壺という生成プロセスを描くことが可能になる。そして三筋文壺の形態には白磁四耳壺が入り込み、そこに変容を受けた経筒の文様が合体したとみるのである。

経筒は経塚において経巻を納める直接容器として機能的に限定されている。外容器についても、外容器として作られた陶製品は経塚での使用を前提としていることが明瞭である。これに対し三筋文壺は経塚以外での使用も確認されており、そこに性格の違いを見ることが出来る。経塚以外での使用例の大半が蔵骨器としてのそれであるため、その問題は後述するとして、ここでは経塚における三筋文壺の役割について検討を試みたい。三筋文壺が多く経塚から出土していることについては研究者の見解に一致を見るところである。しかし経塚においてどのように使われていたかを知りうる資料は以外に少ない。沢田由治氏は、和歌山県の神倉山独立経塚より出土した三筋壺の中に折り曲げられた状態の和鏡と宋磁合子、水晶念珠玉等が収められていたこと、京都今宮神社の三筋壺は自然石の上に伏せて置かれていたことなどを事例としてあげられている。この事例などは経塚一般に認められる銅製経筒とそれを収める陶製外容器というスタイルではない。これと同様の事例が三重県上野市の猪田経塚においても確認されている。この経塚では南北二群、4基以上の経塚が確認され、採集品を加えると陶製経筒1、瓦製経筒13、三筋壺1個体と外容器として知多の広口壺が確認されている。しかし、銅製経筒は検出されていない。三筋壺は上向きに置かれ周囲を立石で囲まれた状態で出土し報告者は経筒として扱っている。(註:「上野市文化財調査概報3 猪田経塚」1975 上野市教育委員会)

沢田氏は、こうした三筋壺のあり方から推して三筋壺の性格を随伴物壺と位置付けている。三筋壺の大多数を占める標準サイズの例をみると、銅製経筒を入れるだけの太い頸をもったものは皆無に近い。しかし随伴物壺であってみれば和鏡を折り曲げねば収められないような規格を採用することに不自然な点がある。三筋文自体は先に述べたように銅製経筒の文様と密接な関連がある以上、三筋文壺には経筒的性格が付与されていたと推測することは不可能ではなからう。そして、更に陶製品としての壺に外容器的役割まで担わされていたのではないかとも考えたい。しかし、この点についての結論は、より詳細な経塚の調査にまつべきであり、ここでは三筋文を通して経筒、外容器、壺が経塚に収斂する点を指摘しておきたい。

本節の最後に触れるべき問題は、生産現場にどのようにして、この種の情報が入り込んだかという点である。赤羽一郎氏は、その研究を紹介した折に挙げたように経塚と深くかかわる存在として勸進僧に注目されている。筆者も赤羽説を全面的に受け入れたい。しかし、次節でとりあげるように三筋文系陶器という枠組でこの問題を捉えた場合、そこに入り込んでいる要素は、より複雑な様相を呈してくることも確かであろう。

(註「無縁・公界・楽」1978網野善彦、平凡社、166頁。網野氏は、諸国を往反、遍歴する勸進聖、上人たちは、寺院を建立し、仏像・経筒を造り、梵鐘を鋳ていたとされ、勸進僧と経筒鋳造との関係を述べている。)

第四節 三筋文・刻画文複合の成立とその性格

三筋文壺出現に関する前節の想定に対して、その手法では解消しきれない項目に三筋文と刻画文を複合した文様を有する一群の製品がある。檜崎氏によって三筋文系陶器の範疇に組込まれたこの単純な三筋文に属さない刻文を有する製品群は、さらに猿投東山窯を中心に生産された三筋文・刻画文複合文を有する一群と渥美窯を中心とする袈裟襷文系文様に大別することが可能である。本節では、このうちの前者、三筋文と刻画文を組合せた装飾を有する陶製品について考えてみたい。

檜崎氏は、三筋文の系譜を辿る過程で編年的に先行し、東山窯に集中して認められる三筋文、刻画文複合品を先行形式として捉え、三筋文壺にみられる三筋文は複合文様の省略化された姿として位置づける見解をしばしば述べられている。

一方、荒川氏は三筋文・刻画文複合について区画文としての三筋文を金属器の文様の転移として捉え、刻画文については、和鏡の文様意匠(石峯寺経塚出土例)や扇面絵、扇絵、薪絵等の美術工芸品に描かれた装飾文様との類似性を指摘することで陶工集団の中に絵師や仏師が介在し当時流行の文様意匠を導入した結果成立したものであるとする見解を示されている。そして、この種の文様の変遷についても刻画文様の主題の推移を中心に描かれており、三筋文・刻画文複合→三筋文という退化プロセスへの言及はない。

筆者は三筋文について本章第三節で述べたように荒川氏と同様、金属器の装飾に由来するという結論に達しており、三筋文壺については銅製経筒の有節経筒の装飾と宋代白磁四耳壺の形態が

複合することで成立したものとする仮説を示したところである。そして、この観点からみた場合、銅製経筒や白磁壺に陶製品と類似する三筋文・刻画文複合がほとんど認められない点をやはり重視せざるを得ない。例外的には仏像の類を線刻した銅製経筒も存在するが、陶製品の刻文とは意匠・文様配置に大きな隔たりがある。このようにみれば東山窯を中心に生産された三筋文・刻画文複合装飾品は銅製経筒や白磁壺とは別個の経緯で成立し展開したと考えたほうがより適切かと思われる。この点で注目されるのは、やはり荒川氏が指摘されている互生産との同時性である。東山窯では八事裏山D窯で瓦とともに三筋文蔓唐草文壺（挿図3-1）が焼かれている。唐草文系の文様は軒平瓦の装飾として普遍的な意匠である。しかも寺院建築との関連で瓦工人は一般の陶器工人よりいっそう仏教と近い関係にあったことは容易に推測しうるところである。東山H-101号窯の瓦と密教法具との併焼にも瓦工人の介在を想定したいところである。このようにみれば三筋文系陶器についても瓦工人の関与が考えられるのであるが、その一方でH-105号窯のように瓦の生産が認められず三筋文牡丹唐草文壺を焼成している窯も存在する。更に眼を知多窯に転ずれば時期的には東山窯の瓦生産窯とほとんど変わらないにもかかわらず瓦生産窯と三筋文壺生産窯とは分離している状況があり問題は複雑である。そして猿投東山窯の刻画文陶器の中には樹木文や藤文、松樹文、草花・鳥文、山水文、人物・獣文など唐草文などとは異質な文様が刻まれた例が存在しており、そこには荒川氏のいう「院政期の貴族層の美意識が基調となって採り入れられ」「絵画を描く事を専門とする絵師や陶工集団との共同作業」を考えるべきであろう。そして、この結論は刻画文を有する製品が単純な三筋文をもつ製品とは異質な要素を含んでいることを示しているということになる。

猿投東山系の三筋文・刻画文複合装飾や刻画文を有する製品は、その大半が壺と経筒外容器に限られている。そして、その用途も三筋文壺と同じく経塚や墓址などの宗教関連の遺跡に集中している。銅製経筒とは異なる経路で成立した可能性の高いこれらの刻画文系製品と経塚との関連についてはどのように描きうるであろうか。唐草文系文様が瓦との関係で仏教とのつながりが認められることは既に記したが、この他に関連性を認められるものに播磨石峯寺経塚出土の瓜蝶鳥文壺がある。この壺に描かれた文様は、同じ経塚から出土した和鏡の文様と意匠が共通しており、その転移が想定されている。経塚出土の和鏡の文様との関連では秋草文もその系列に含めることが可能であろう。

この他、多少無理はあるが中国製の宋代青白磁経筒に蓮花唐草文を沈文で施した例があり、経筒と唐草文系装飾とのつながりうる事例を示している点もここであげておきたい。

三筋文壺にみられる三筋文には経筒の装飾との共通点があり、その文様には塔のイメージが含まれているとする見解を本章第三節において提起したのであるが、この三筋文・刻画文複合装飾においては、その成立過程が三筋文と異なるように、その文様の役割にも多少相違があったとみるべきであろう。これらの複合文をもつ製品をみると三筋文や二筋文が刻画文の区画帯を為すために刻まれた感の強いものがある。八事裏山D窯の蔓唐草文壺や渥美窯産といわれる芦鷺文壺などがそれである。その一方で牡丹唐草文をもつ陶製経筒外容器の様に銅製経筒の三筋文をその

まま移し、その空間に刻画文を配したと考えられるもの、更に猿投NN-G-65号窯出土の藤文四耳壺のように高台耳付三(二)筋壺の三筋文を無視して藤文を刻した事例などその性格は一樣でなかったように考えられる。

次に刻画文壺、三筋文・刻画文複合装飾を有する壺の蔵骨器的性格についても言及しておきたい。中世刻画文壺の代表として常にとりあげられる渥美窯産とされる秋草文広口壺は発見時、壺内には火葬骨が納められており蔵骨器として用いられたことを明瞭に示している。この壺の装飾には柳、瓜、草花、薄、蜻蛉といった文様が流麗なタッチで描かれており従来、夏から秋にかけての季節を描いたものとして解されてきた。これに対し、檜崎彰一氏は、1988年の「日本陶磁絵巻」図録において新たに柳を春の風物と捉えることで、この壺の文様を当時流行であった四方四季絵を意図したものとする見解を示されたのである。この檜崎説に従えば興味深いテーマが浮上してくる。それは、四季の同時存在という想定が古代以来、他界を表現する手段として文学史上で扱われた事実との関連である。(註「酒吞童子異聞」1977、佐竹昭広、平凡社165頁。四方四季の景観については、鬼の浄土や鶯の浄土といった人界から隔絶した仙境、他界表現として物語にしばしば登場している。)秋草文壺に刻まれた四季性が他界を表す表現であってみれば、この特殊な壺が蔵骨器として使われたことと誠にうまく適合することになるのである。さらに秋草文壺と並んで著名な刻文壺である渥美窯産の芦鷺文三耳壺についても荒川氏は、彩絵檜扇の文様構成との類似性などを指摘し、この時代の工芸意匠にしばしば見られるものとされているが、日本武尊の靈魂を運んだ白鳥の伝説にみるような死者との関連をそこにみるのは牽強附会の誇りを免れないであろうか。

更に樹木文についても荒川氏は吉岡康暢氏の「常磐木に生命の再生ないし豊穰という意味をもたせた」という見解をひいているが、ここでも生命の再生という死との結びつきを窺うことができるのである。

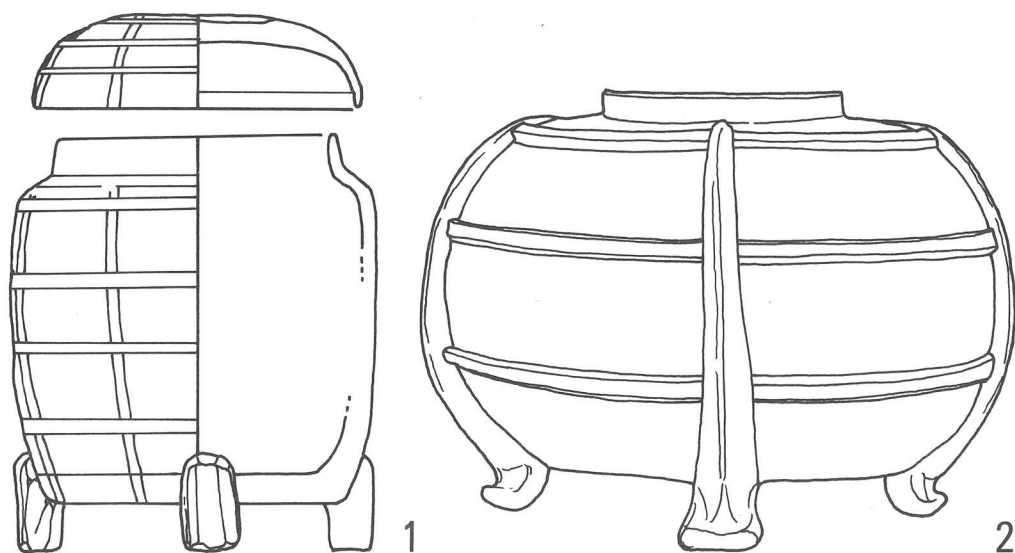
多少憶測めいた見方ではあるが、このように蔵骨器としての機能と刻文との関連を想定すれば、これらの文様の背景に例えば上層階級人の死という特殊な契機を透視することもあながち無謀とばかりもいえないのではなかろうか。

三筋文系陶器のうち銅製経筒に由来すると考えられる三筋文経筒及び外容器と三筋文壺については諸国を遊歴する勸進僧の経塚造営活動と結びつけて捉えられるのに対し、三筋文、刻画文複合の装飾を有する経筒外容器や壺、刻画文壺については、それに加えて瓦工人や絵師、仏師などの関与も想定されるところであり、その出現の契機には経塚だけでなく特殊蔵骨器の制作という個別な理由にも配慮すべきであるということになる。

第五節 渥美窯の三筋文系陶器にみられる独自性

三筋文に関連する文様として、いま一つ検討を要する項目に渥美窯で集中的に生産された袈裟襷文、蓮弁文系の文様を有する一群の製品がある。これらの文様は、その内に三筋文を重要な構成要素として含んでいるのである。

渥美窯では、猿投東山窯にみられるように陶製の経筒、経筒外容器を生産しており、三筋文を施したものの、無文のもの、突帯をもつもの、刻画文を有するもの、刻銘を刻み込んだものなど、その多様性は東山窯を凌ぐほどである。そして、これらが銅製経筒の影響下に成立したことは自明の事であり、その点で他窯の三筋文系陶器と同系統に属しているとみることができる。しかし、その一方で渥美窯ではかなり早い時期に他窯では類例をみない袈裟襷文四足壺のような器種を産出し、その独自性を発揮しているのである。(挿図5-1) この袈裟襷文四足壺について榑崎氏は1978年論文で経筒外容器としての機能的意味付けを行なうとともに渥美窯の袈裟襷文系文様の原型として位置付けられている。一方、小野田勝一氏は、この資料について出土地は不明としつつも青白磁合子が伴出したと伝えられることと、その形態から推して経筒外容器であると考えられている。(註「日本陶磁全集8、常滑渥美」1977中央公論社) 経塚の随伴物として宋代の青白磁合子は一般的に認められることからみれば、この容器が経塚に用いられていた可能性は高いとみるべきであろう。しかし、この種の形態を有する類例が経塚出土資料の中にほとんど見当たらない点にいささか疑問を抱かざるを得ないのである。そこで対象を経塚に限定せず陶製品全般についてみると、この四足壺と類縁関係をもつのではないかと考えられる資料が須恵器や鉛釉陶器、灰釉陶器の火葬骨壺に見出さるのである。須恵器や三彩陶器などの獣足付蔵骨器は、年代的にみて隔たりが大きく、渥美の四足壺との直接的関係は認めがたいが11世紀代の中国からの舶載品を摸したとされる京都相国寺慈照院伝世の四足壺や京都市音羽山(清水寺裏山)出土の同型の火葬骨壺(挿図5-2)、そしてその同種の例として京都市今熊野観音寺墓地出土の三耳壺や比叡山横川出土の四足四耳壺など10世紀から11世紀にかけて猿投窯を中心に生産された特徴的な一群の四足壺は渥美例の祖型とするに相応しいと考えられる。これらは主に火葬骨壺として用いられ



挿図5 1. 渥美窯製袈裟襷文経筒外容器

2. 京都清水寺裏山出土蔵骨器

ているが渥美窯の例と同じように足をもった短頸壺で突帯による表現ではあるが袈裟襷文と共通する体部文様を有しているのである。文様意匠の共通性と形態の類似、そして時期的にみても11世紀代末期となれば両者の関係は無視しがたいように思われる。

渥美窯では、この四足壺にみられる袈裟襷文が大型の壺や広口瓶さらに三筋文壺と同程度の壺、あるいは長頸壺などにも様々に変容しながら展開し、他窯の三筋文系陶器とは異質な特色をみせている。袈裟襷文から蓮弁文へというプロセスについて筆者は今のところ先達の見解に批判を加えるだけの力量を持ち合せていないが蓮弁文の成立について江崎 武氏が示された経筒蓋部の笠に見られる懸垂の蓮弁文様の袈裟襷文への導入や縦位の蛇行沈線を経筒の瓔珞に比する見解などは、渥美窯における独自の経塚文化の撰取を物語る仮説として大へん興味深いものである。つまり、この説に従うとすれば、渥美においては東山窯や知多窯とは別系統の銅製経筒の要素がもたらされ壺の装飾へと転移したとみることができるのである。

渥美窯では知多窯とは対照的に三筋文系文様を有する製品の器種が豊富であることは既に指摘したところであるが、三筋文系陶器に限らず、この地域では三重県小町経塚出土の仏像光背や皿焼古窯出土の陶製五輪塔等、経塚に関連する多種多様な生産が行われている。そして、さらに秋草文壺や芦鷺文壺の存在を考え合わせれば、そこには陶器工人だけでなく仏師、絵師、勧進僧といった人々が様々に関与していたことを知る事ができよう。そうした現象の背景を知る上で見逃し難いのが三河国司であった藤原顕長銘を有する壺の存在である。この壺は渥美の窯業生産に領主層が深く関わっていたことを雄弁に物語っており、伊良湖の東大寺瓦窯もその背景のもとに成立したと見る事ができよう。そして渥美における独自性の発現の史的背景もまたこのあたりに由来するのではなかろうか。

第六節 三筋文系陶器の蔵骨器的性格

植崎氏の1978年論文には三筋文系陶器の出土地名表が付されており、各地の出土例とその遺跡の種類が記入されている。論文が発表されて既に10年以上が経過しており三筋文系陶器の出土事例は当時に倍するほどの数に登っている可能性があるが、とりあえずここではこの地名表をもとに検討を加えてみたい。

まず地名表に示された遺跡の総数は 117箇所である。そして、その総数のうち窯跡を除く消費遺跡は84箇所になる。この消費遺跡を分類すると経塚が36箇所と最も多く、次いで墓址が20箇所、性格不明が23箇所その他が 6 箇所となる。不明の23箇所についても大半は経塚と墓址になると推測される。また経塚出土の三筋文系陶器のうち 8 例は経筒と経筒外容器で三筋文系文様をもつものである。

これまでの記述では、三筋文系陶器は経塚との関連を基軸に論じてきたのであるが上記の分類をみれば蔵骨器的性格も、この製品群の機能として無視し難い問題であることは明らかであろう。

蔵骨器として使われた中世陶器の器種、器形は実に多種多様であり、特定の器種のみが選定されていたとは考えられない。さらに古瀬戸の瓶子が口頸部を切取って蔵骨器として利用されてい

るような例が示すように本来その器種に与えられていた機能とは別の目的をもって後に蔵骨器に転用されている事例も少なくない。こうした蔵骨器のあり方からみれば三筋文系陶器の蔵骨器としての使用事例も、二次的にその材質、形状が骨壺に利用されたのであって、三筋文系陶器の本来の機能ではなかったという想定も充分成り立ちうるのである。ただし、前節で触れたように渥美の秋草文壺や芦鷺文壺、東山、珠洲の樹木文壺の様に当初より蔵骨器としての使用を目的に制作されたことをにおわせる三筋文系陶器、刻画文壺が存在したことも特殊例とはいいながら事実である。

三筋文系陶器のうち経筒と経筒外容器を除く主として壺類についてはどうであろうか。それらが経塚で多く用いられていることを手掛かりにして蔵骨器としても用いられることの多かった属性を考えてみたい。

経塚は、一般に經典を彌勒の第二の釈迦としての再生の期まで地下に埋納し保存しようとする信仰に基づく作善行為として普及したものと理解されている。この經典は、いうまでもなく釈迦の教えを伝えるものであるが、その一方で釈迦の教えを集積した經典は法舍利として釈迦の遺骨、仏舍利と同じ意味をも保有したといわれる。（「経塚遺宝」P387）経塚関連遺物や銅製経筒に五輪塔や宝塔的造形やその影響が色濃く現れているのは、經典＝法舍利を納める舍利塔としての造形であったことによると考えられるのである。そして銅製経筒と深くかかわり、その塔としてのイメージまでが転移したと推測される三筋文系陶器においても舍利容器的性格が与えられたとみることは、けっして荒唐無稽な仮定ともいいきれないのではなかろうか。

三筋文系陶器出土地名表のうちで住居址出土は、わずかに3例あるのみである。そして、その3例のうちの2例までが渥美窯の生産地に近接しており、住居址出土例は、きわめて特殊な事例であったように見受けられる。また、その他として分類した事例についても寺院址や祭祀遺跡からの出土例であり、三筋文系陶器の用途の大半が宗教的性格を強く有していることは間違いないのである。三筋文系陶器の蔵骨器的使用は全体的にみて経塚での納経具としての使用より多少後出的であるようにも見受けられる。渥美の袈裟禪文四足壺の祖型が先の想定通り灰釉陶器の蔵骨器であったとすれば、その成立時点ですでに蔵骨器的性格を袈裟禪文系陶器は保有していたことも考えられ、この点は今後充分に検討する余地が残されている。しかし、ここではひとまず三筋文系陶器は経塚での使用を目的として当初生産されたものであり、経塚において納経具としての仏舍利容器的役割を担ったことから舍利容器、蔵骨器へとその機能が転ずるという可能性が多く存したという推定を提起しておきたい。

第七節 三筋文系陶器出土地の地域的偏在性

次に三筋文系陶器の出土地の分布についてみることにしたい。先の檜崎氏の地名表から生産址を除き、経塚、墓址、祭祀遺跡等を地域別に数えてみると東北地方14例、関東甲信越地方14例、中部地方29例、近畿地方24例、四国地方2例、中国地方1例という分布になる。近年の調査例の急速な増加を考えれば、個々の出土例は、かなり増えていると思われるが地域毎の比率には、さ

ほどの変化はないように推測しうる。このようにみた場合、三筋文系陶器の消費地は東山、知多、渥美といった主要産地をその内に含む中部地方で最も多く出土しており、次に経塚造営の中心地であった近畿地方が多く、残りの大半は関東甲信越と東北という東日本において消費されていることになる。一方、参考として三筋文系陶器の生産された時代の経塚の分布をみると近畿地方の奈良、和歌山、三重などに大規模な経塚群が形成されており、また九州北部の佐賀、福岡地方にも高い密度で経塚が分布している。さらに両地方ほどに密度は高くないにしても中国瀬戸内地方にも相当数の経塚が存在しており、その経塚分布図をみる限り、この時期の経塚分布の中心は近畿以西の西日本に中心があったといえよう。（註「経塚」1985関 秀夫、考古学ライブラリー33、ニューサイエンス社）この経塚の分布は、三筋文系陶器の出土地と比較した場合、大きく相違しているのである。三筋文系陶器の拡がりとは対照的に近畿地方を中心に東方へと拡がっているのである。三筋文系陶器は経塚に限らず墓址でも使われている面もある。従って三筋文系陶器の出土地の偏在性を単に経塚の分布のみから説明することは危険であるが、三筋文系陶器と経塚との深い結びつきを考えれば三筋文系陶器には近畿・東国型の経塚関連物という性格を与えることも考えられよう。

三筋文系陶器の成立背景を以上のようなあり方から推測すれば、経塚文化の中心地であった近畿地方の流れが東海地方の陶工集団へと波及し、直接、間接の接触によってこの種の特殊陶器類が出現し東国へと浸透していったと考えることができる。中央文化の陶工集団への波及には、荒川氏が指摘された絵師、仏師や瓦工人、更には赤羽氏のあげる遊行的性格をもった勧進聖や熊野、浅間、白山等に関わる修験の活動を考慮すべきであろう。

第三章 知多古窯址群の三筋文壺

第一節 三筋文壺を焼成した窯

知多半島古窯址群は、半島の丘陵部全域にひろがっており、平安時代の末期から南北朝期にかけての約300年間に築窯された数千基といわれる窖窯群によって構成されている。この大古窯址群は、これまでに300基近くが発掘されており、その成果から知られるこの地の生産様相は、けして一様とはいえない。中世前期を通じて生産された様々な器種について、その器種ごとに窯址を分類していくと、甕、壺といった大型品を焼成している窯と甕、壺を焼かず碗、皿、鉢といった小型品を専ら生産していた窯の相違が目につく。そしてこの窯における生産品の違いは、窯の分布の上にも反映しており、小型品を焼成している窯の分布は、前者の分布を取り巻く形でひろがっているのである。この分布の相違はとりわけ平安末から鎌倉前半の時期に顕著に認められる現象である。そして、この時期こそ知多古窯で三筋文壺が盛んに生産された時代であった。

過去の発掘によって三筋文壺を出土した窯は以下の17例である。

- 常滑市、柴山第2号窯（甕、12C、複線） 図6～9
- 金色東第3号窯（甕、14C、単線） 図16
- 二ノ田第2号窯（甕、12C、複線） 図10
- 二ノ田第4号窯（甕、12C、複線）
- 松洲第21号窯（甕、12C、単線）
- 松洲第22号窯（甕、12C、複線）
- 高坂第6号窯（片口鉢、12C～13C、単線） 図15
- 高坂1-2号窯（甕、12C、複線）
- 出地田古窯（5基、甕、12C、複線、櫛目文） 図1～5
- 鎗場御林B-2、4号窯（甕、12C、複・単線） 図11
- 〃 D-1、2号窯（甕、12C、単線） 図12
- 大岨古窯（甕、12C、単線）
- 知多市、巽が丘第3号窯（非甕、12C、単線？）
- 半田市、椎の木第1号窯（甕、12C、複線櫛目文？）
- 長成池第1号窯（甕、12～13C、単線） 図13、14
- 武豊町、中田池古窯（非甕、13C、単線）
- 南知多町、大井釜山古窯（非甕、12C、複線）

以上が三筋文壺を検出した事例である。その分布をみると三筋文壺出土窯が常滑市域に集中していることが明瞭に認められる。そして半田市の二例は常滑市に近接する丘陵に築かれた窯であり、武豊町も半島中央部に属しているといえよう。従って知多市の巽が丘第3号窯と南知多町の

大井釜山第1号窯を例外とすれば半島中央部の現常滑市域を中心とした地域が三筋文壺の主要産地であったといえよう。

次に三筋文壺と共伴した遺物のうちで甕の出土の有無をみると多くの窯では甕を伴出しており高坂第6号窯、中田池古窯、大井釜山第1号窯、巽が丘第3号窯の4例が甕を伴っていない事例である。ただし、このうちの高坂第6号窯は窯体の一部が検出されたのみで窯の大半と灰原が既に消失していたこと、隣接する同時期の第4号窯では甕が焼かれていたことを考え合わせると、この窯で甕が焼かれていた可能性は高い。すると残る3例は、いずれも知多市、武豊町、南知多町になり、三筋文壺の中心産地からはずれた外縁部に相当するのである。従って、この三例を中心地からの波及として捉えることも一つの想定として可能であろう。

また繰り返しになるが知多の瓦陶併焼窯では、三筋文壺の生産期間と操業期間が重複しているにもかかわらず三筋文壺の出土例はなく東山窯にみられるような瓦と三筋文系陶器との共伴関係は存在していない点も重視されるべき事柄であろう。知多の古窯址群では三筋文をもつ製品は壺に限られており、その壺も耳状装飾や高台を有する例は極めて少なく、また三筋文に刻画文を組み合わせた例や突帯による三筋表現も認められない。そして、それらに加えて陶製経筒の生産も行われていないという知多の状況は、三筋文壺が東山窯あたりで完成された後に知多へと導入された可能性をうかがわせている。しかし、知多古窯の中で東山窯の色彩を強く反映している輪花碗を生産しているような窯で三筋文壺の出土がないこと、更に地理的に東山窯の影響を受けやすい東海市、大府市周辺で三筋文壺の出土がないことなどからすれば東山窯からの直接的な導入を想定することは困難である。

平安末期の知多古窯址群の製品中には甕や広口壺、羽釜、鍋など現時点で器形成立の系譜が判明していない器種が含まれている。そして三筋文壺は、それらの器種を焼成している窯で多く検出されているのである。

中世陶器にみられる三筋文の成立は、編年的にみて猿投東山窯の先行性は認めざるを得ないところであるが知多における三筋文の出現については、単に東山窯から直接的にもたらされたという解釈だけではすまされない問題が残されているのである。

第二節 三筋文壺の編年について

知多古窯址群での三筋文壺の生産年代については杉崎、檜崎、赤羽各氏の平安末(12C)から鎌倉時代中葉(13C中頃)までとする見解と沢田氏の平安末から鎌倉初期までとする説に分けることができる。しかし、杉崎氏の見解にはその後、変化が認められる。それは氏が主体となって調査された金色東第3号窯の報告書において、本窯出土の三筋壺を氏が第三形式後半、(14世紀後半)に位置付けていることによる。

三筋文壺の出現期については各氏とも平安時代の末期12世紀代に位置づけており、筆者もまたこの見解に従うところである。これに対し、その終末については上記の通り各氏、見解を異にしている。筆者は、杉崎氏と同じく金色東第3号窯出土の三筋文壺(図3-16)を終末段

階の資料として位置づけることにしたい。この三筋壺は単線三筋文を有しており、口縁の端部を上下にのぼして縁帯状に成形するという特徴をみせている。全体に厚手の雑な造りで三筋文の施文も粗雑な印象を受ける。この三筋文壺にみられる口縁部の形状は、伴出している甕、広口壺の口縁部のそれと共通しており、いわゆる断面N字状の口縁形態である。他の伴出品としては、高台をもたず下胴部に縦位の篋削り痕を残す片口鉢がある。この金色東第3号窯の年代的位置付けを筆者は杉崎氏より50年ほど引き上げて、14世紀前半の鎌倉末期～南北朝初期に置きたい。そしてこれによって知多古窯址群での三筋壺生産の期間を平安末(12C)から南北朝初期(14C前半)に設定する見解を先達の諸説に加えたい。

知多古窯址群で産出された三筋文壺は、すでに100例以上の数にのぼると思われるが、その大半は、沢田氏の見解にみられるように平安末期から鎌倉初期にかけて生産されたものとみることができる。そして、この生産量の減少する時期は、経塚のあり方の変化とも符節を合せているように見受けられるのである。古窯出土品の中で鎌倉時代の初期よりも新しい年代、13世紀以後の三筋文壺を抽出すると、先の金色東第3号窯例の他に中田池古窯例と長成池第1号窯例の計3件、4個体があげうる程度である。中田池例は、口頸部の形態に平安末期的特徴を残しているが、三筋文は単線の二筋文になっており、共伴の片口鉢、山茶碗の年代から推して13世紀の中葉あたりに位置付けられるものである。長成池例は2点あり、一例は単線三筋文(図3-13)、他例は単線二筋文(3-14)である。二例は三筋文の相違以外は近似しており同時に製作されたものと考えられる。器高が低く、全体に粗雑な造りで三筋文壺の年代観からすれば13世紀の第2四半期あたりに位置付けたい資料である。しかし、この三筋文壺の出土した地点に築かれた窯からの出土品には12世紀代の甕があり、不確定要素も残されている。

平安末期から鎌倉初期にかけての三筋文壺は、その数量が多いだけでなく形態的にも多様性をみせており、作者の違いによる細部の変化がかなり明瞭に作品に反映している。従って、そこから時間による可変要素を抽出し、細分していくことは難しく、ここでは二、三の見通しを述べる程度にして、その結論は後の課題としておきたい。

檜崎、赤羽両氏によって提出された三筋文の単位文における櫛目文、複線文、単線文の相違と時間的変化との対応関係については、筆者もその有効性のある程度認めている。しかし、三本線の櫛目文と複線文は同時に存在し、複線文と単線文もかなりの時期共存することは確実である。そこで今のところ筆者の考えでは櫛目文は1100年～1175年複線文は1100年～1225年、単線文は1175年～1350年という大枠の中で位置づけようとするものである。

沢田氏が早くから指摘されていた三筋文の概念の乱れとしての二筋文、四筋文、五筋文の存在について、後二者の後出性を立証しうる根拠は認められないが二筋文については年代の後出性を指摘することが可能であろう。古窯出土例で先に中田池例、長成池例からみて単線二筋文の出現は、三筋文の退化形態として13世紀代に入ってからのことと考えられる。

杉崎氏によって指摘された肩部の張りの強弱も、一つの傾向として、それを捉えることは可能である。しかし、この傾向は一律に認められるものではなく、細身の体部に櫛目文を有する例が

あるように例外事例が少なくない。

肩部の張りの強弱という変化と同程度の要素は、口頸部の長短や形状にもみとめられる。12世紀代の多くのものは、頸部から口縁部へとなめらかに連続し、外方への拡がりも大きいのに対し、12世紀の最末期から13世紀にかけての多くの例は直立する頸部の末端を外側へわずかに屈曲させて口縁部を形造っている。さらに器高についても口頸部の短いものは長い例に対し低くなっているという傾向を認めることができる。

三筋壺の生産期間は私見では平安末から南北朝初期までの250年間であると述べたが、その大半は前半期に行なわれ、後半は痕跡的に生産されていたことも確かである。前半期の多様な三筋文壺の生産においては経塚文化の担い手としての勸進僧や修験の介在が考えられるのに対し、後半期の三筋文壺については、生產品の一器種として記憶された、この壺を陶工の意志によって特殊な意味づけのもとに産出されたと考えた方がより適切であろう。

第三節 三筋文壺の成形、整形技法

三筋文壺の成形は、他の壺、瓶類と同様の粘土紐巻き上げ、輪積み技法によっている。円盤状の底部を最初に造り、その縁周に高さ2～3cmほどの粘土紐を帯状にしつつめぐらし、3段ほど重ねて第一工程とする。次に胴部を成形して第二工程を終える。第二工程までは篋や指による横ナデで内面を整形し、外面は縦方向の篋けずり状のなでつけによって粘土紐の接合部を密着させつつ整形している。

第三工程は肩部の成形であるが外面は横位の篋けずり整形が施されるのに対し、内面は粗雑な横なでがみられる程度で粘土紐の積上げ痕が残るほどである。最後の成形は口頸部の第四工程で終る。そして、この部分の整形は、なめし皮と思われる用具を用いて回転なでによって行なわれている。この仕上げは口頸部の内、外面と一部肩の上半にも及んでいる。以上の4工程によって三筋文壺は形造られているが、各工程の区切りごとに、ある程度の乾燥期間が挿入されていたことは容易に推測しうる。

他に、この器種では、底部から下胴部にかけて、縦位の篋けずりの上に更に横位の回転篋削りが鋭く施されており、第一、第二工程のいずれかの終了時に為された整形と考えたい。更に上胴部には、かすかな回転ヘラ削り痕が認められ第三工程か第四工程の終了後に施されたものと思われる。

三筋文の施文は、いずれの整形痕にも消されることなく施文されていることから成・整形の終了時に施文されたことは確実である。各工程間の乾燥時間を考慮すると三筋文を一度に付けたことには多少疑問も残るが、三筋文の中央の沈線は明瞭に刻まれているのに対し、上下の沈線は複線が単線状になったり、途切れたりしている例があり、全体の成形・整形が終了した後に三本の沈線が一度に回転施文されたものとみるべきであろう。

まとめ

三筋壺は知多古窯址群の製品の中で、もっとも人気のある器種であるといえよう。沢田由治氏によって古くから強調された焼け味、端正な容姿、手ごろな大きさ、稀少性などがその人気を構成する要素であろう。そして三筋壺にまつわる研究者の言説も知多古窯の製品中においてバラエティーに富んでいるといえよう。拙論は、諸先輩によって提出された、この三筋壺にまつわるテキストを自らの関心に従いつつ読解し、総合することを当初の目的としたものである。従って近年急激に増加しつつある新たな出土品に関する解釈や資料収集については、決して充分に行なわれておらず、今後課題を残すものである。更に知多半島内の三筋文壺についても、更に手を広げれば、まだまだ資料を増やすことが可能であったが、これも充分果しえなかった。いずれ機会を改めて、より詳細な編年を確立したいと願っている。ただし、拙稿で集成図的に示した実測図をみても判るように、三筋壺の個体差は工人差を反映して大きく、単に編年図作成を急ぐより、その個体差の生ずる背景にこそより豊かな歴史性が隠れているようにも思われる。実証主義を基とする考古学研究において本論は、その性格からは大きく逸脱し推論に憶測を重ねるような作業に時を費やしすぎたところも少なくなく諸賢の御叱正を乞うてやまない。

尚、末文ながら種々、御高配を賜わり、さらに資料の御提供をいただいた各位諸機関に対し記して衷心より感謝の意を表したい。

愛知県陶磁資料館　一宮市博物館　今宮神社　京都国立博物館
武豊町歴史民俗資料館　常滑市立陶芸研究所　中島文化財委員会
名古屋市博物館　半田市立博物館

| | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| 赤羽 一郎 | 浅田 員由 | 荒木 五一 | 荒木 俊夫 | 荒木 ゆり |
| 岩野 見司 | 猪飼 五月 | 磯部 幸男 | 市野 昭 | 伊奈 浜治 |
| 稲葉 和彦 | 稲葉 実 | 井上 高二 | 岩橋 栄吉 | 小川 和美 |
| 小川 仁六 | 奥川 弘成 | 梶山 勝 | 木村 良一 | 鯉江 良二 |
| 甲谷 弘 | 沢田 茂樹 | 澤田 博光 | 沢田 由治 | 柴垣 勇夫 |
| 新海 康行 | 新家 唯一 | 対馬 正道 | 立松 宏 | 谷川 省三 |
| 谷川 菁山 | 谷川 敏雄 | 谷川 宏 | 谷川平八郎 | 新美 忠夫 |
| 野末 浩之 | 本多 静雄 | 村井 敏夫 | 山田 勝治 | |

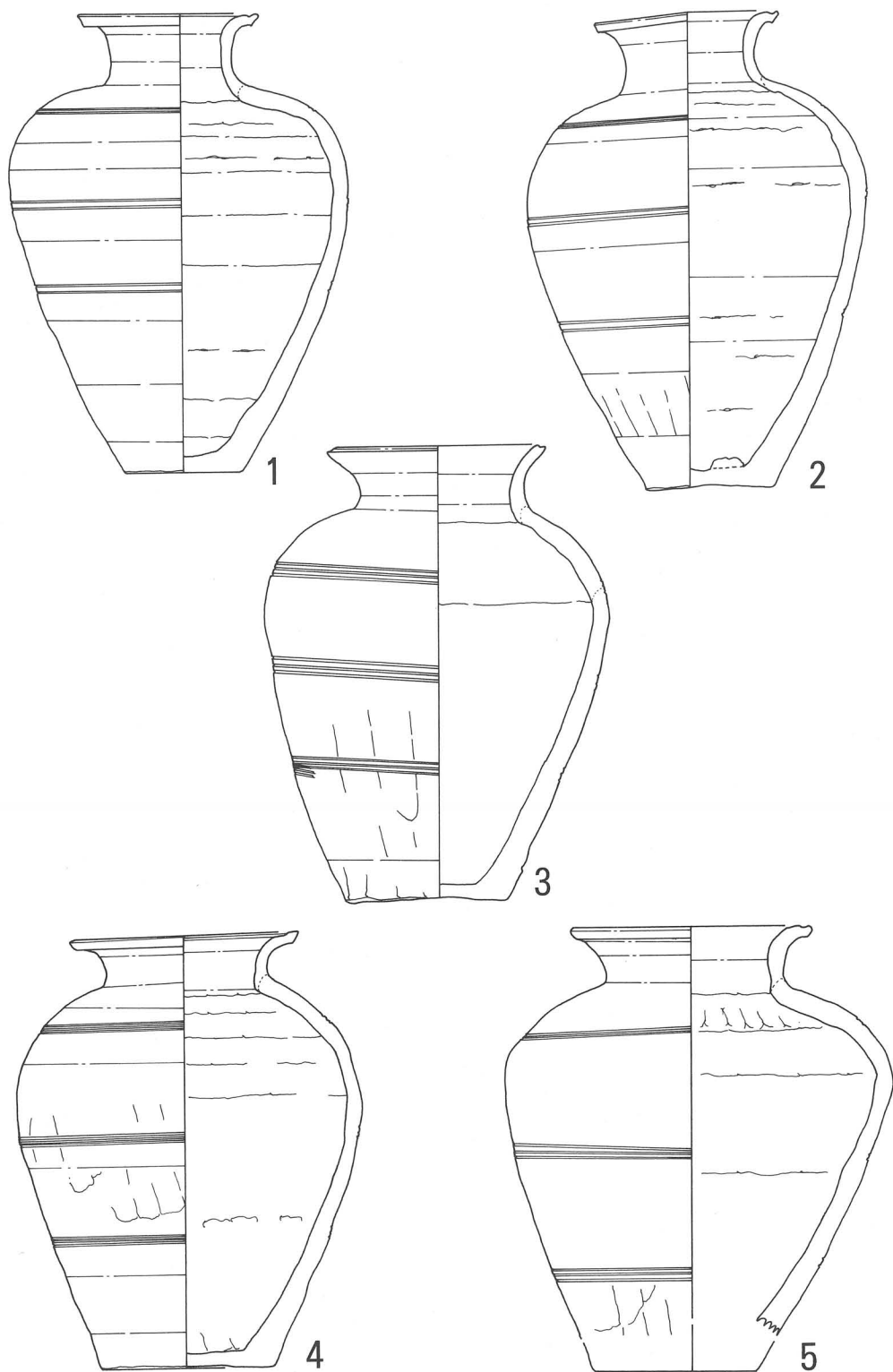
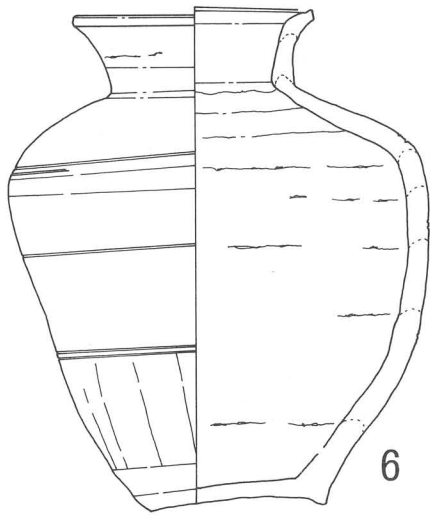
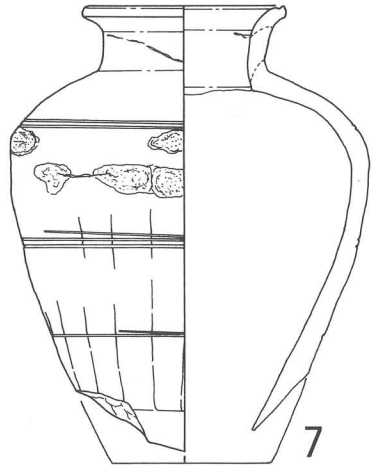


图1. 1~5. 出地田古窯出土三筋壺

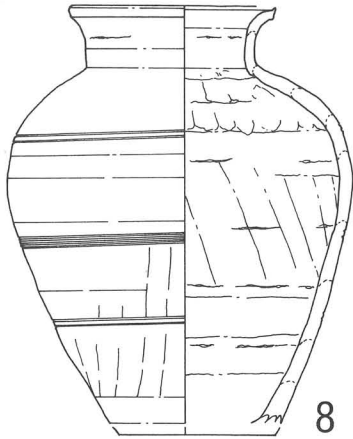
0 10cm



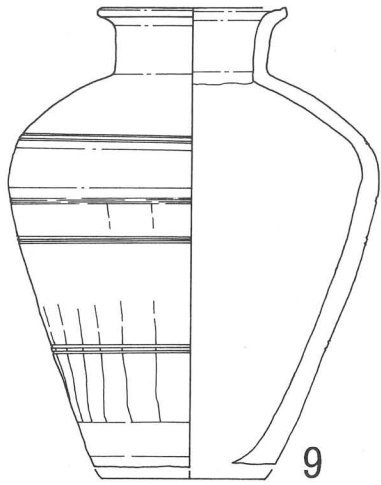
6



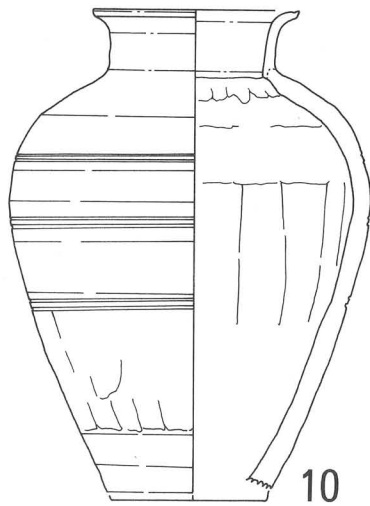
7



8



9



10



图2. 6~9. 柴山第2号窯出土 10. 二ノ田第2号窯三筋壺

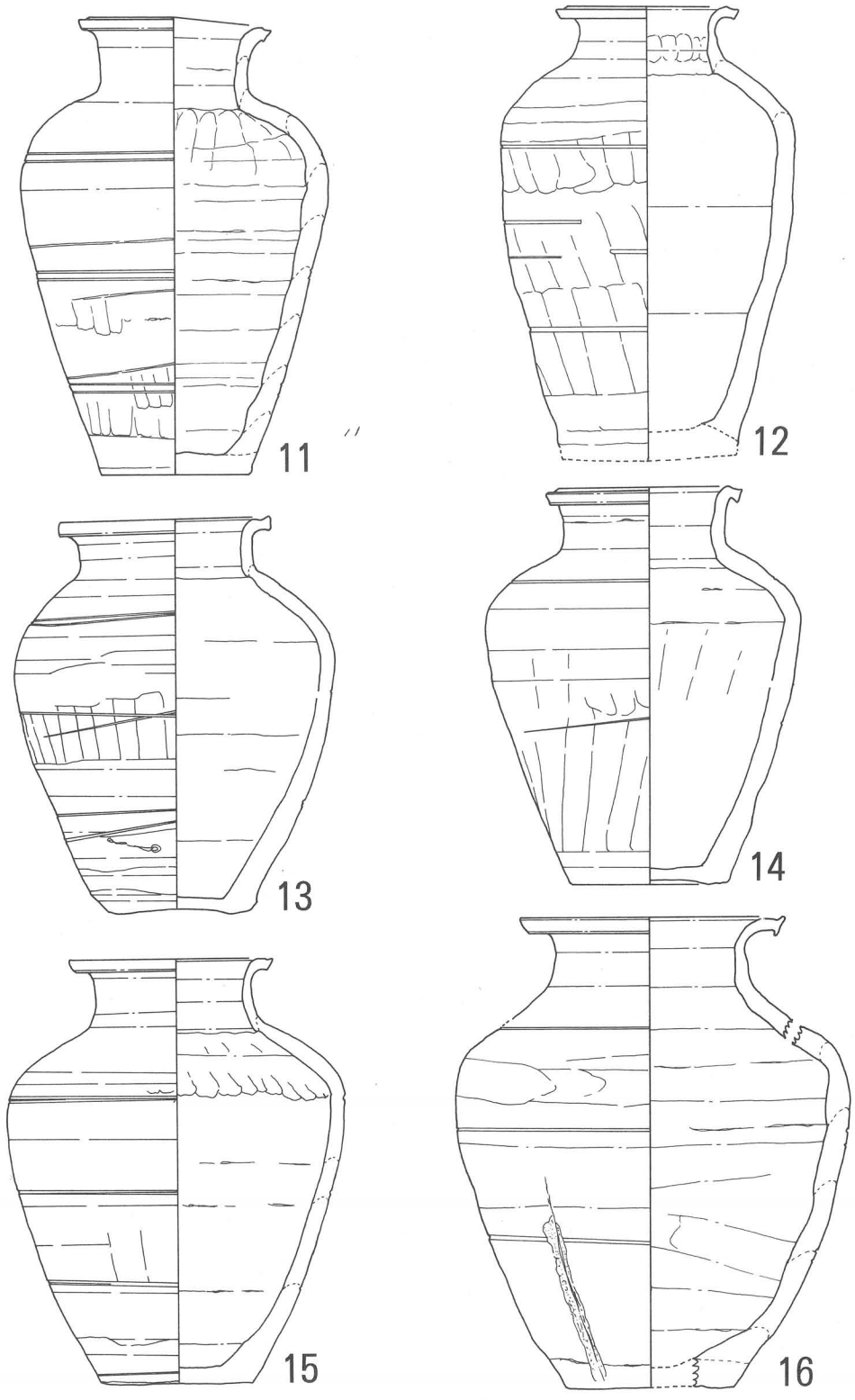


图3. 11. 鎗場御林古窯B区出土 12. 鎗場御林古窯D区出土
 13.14. 長成池第1号窯出土 15. 高坂第6号窯出土 16. 金色第3号窯出土三筋壺

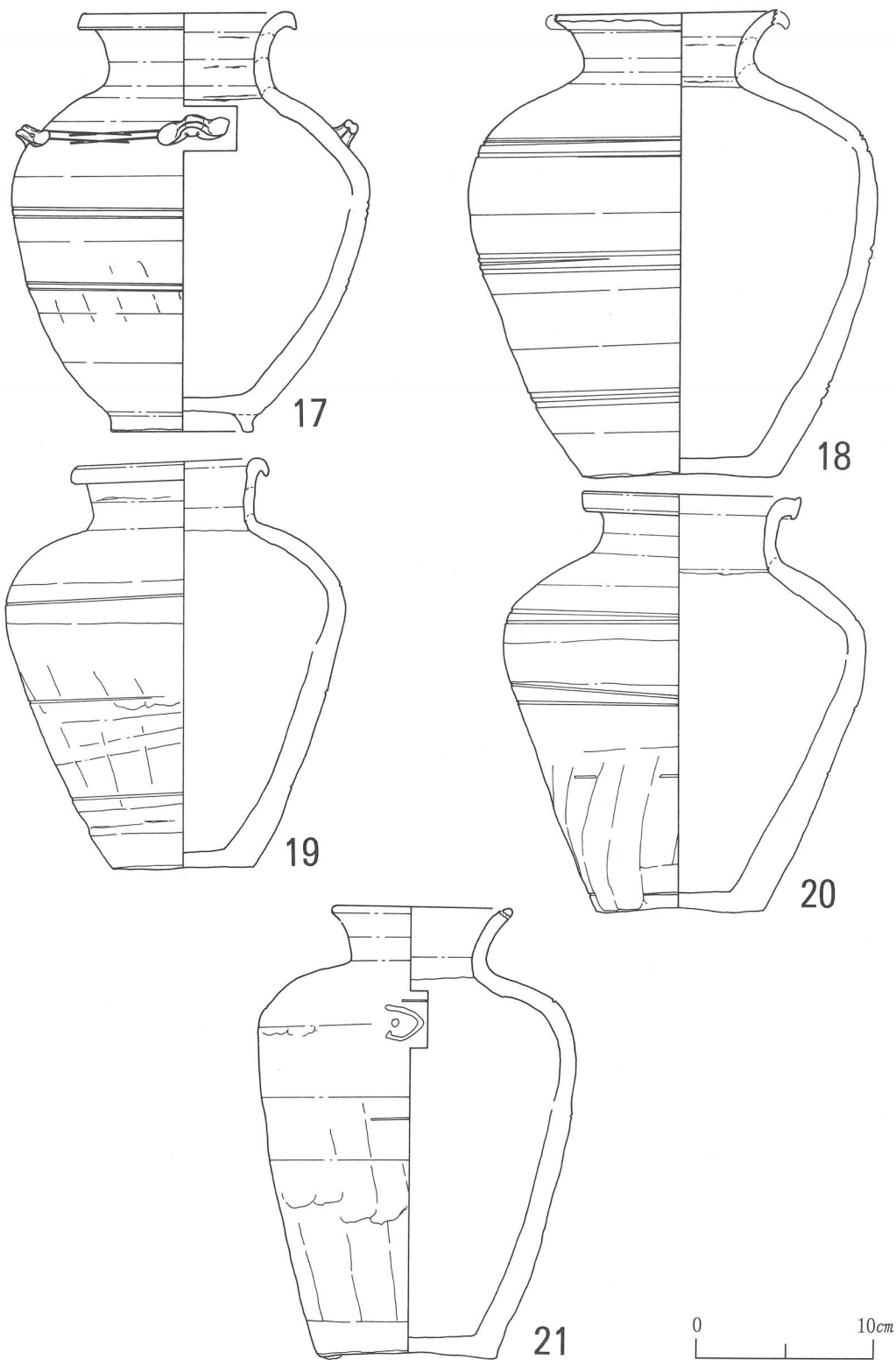


图 4. 17.18. 猿投窯製 19.20.越前窯製 21.渥美窯製三筋壺

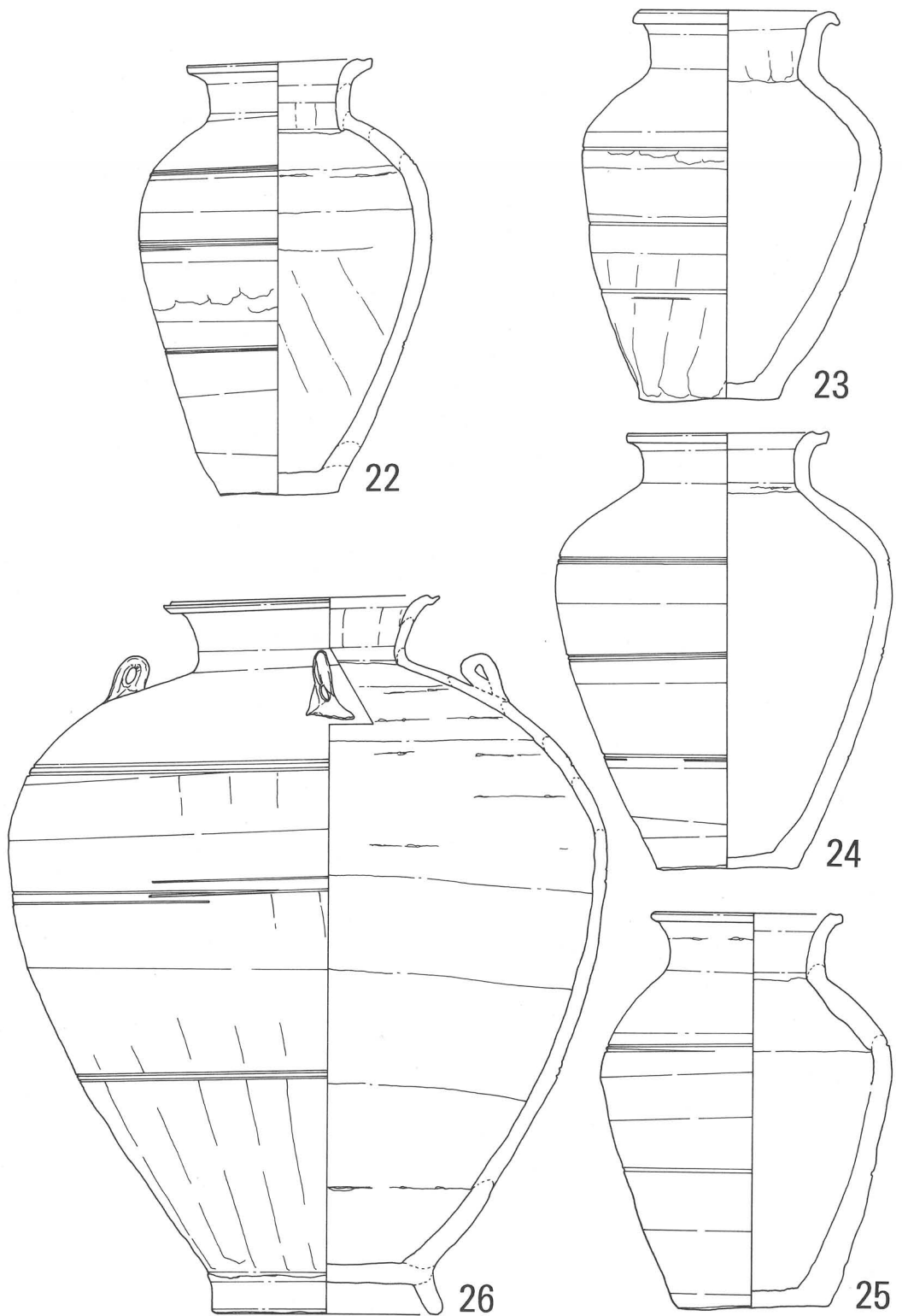
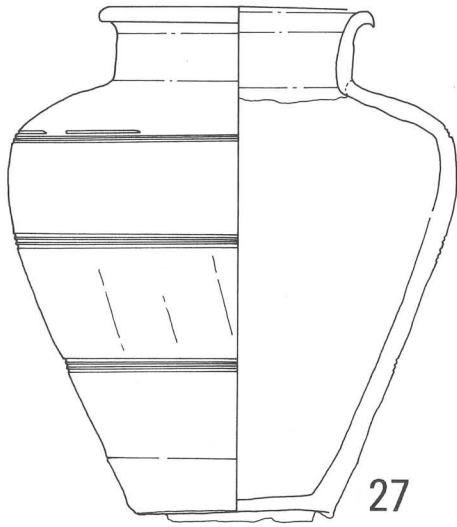
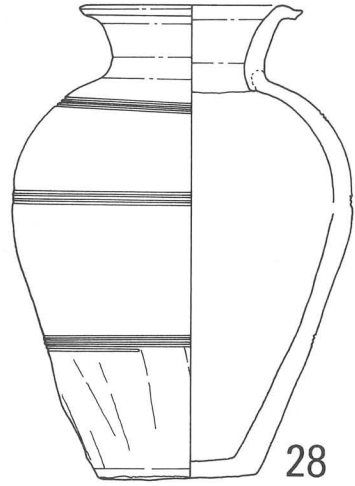


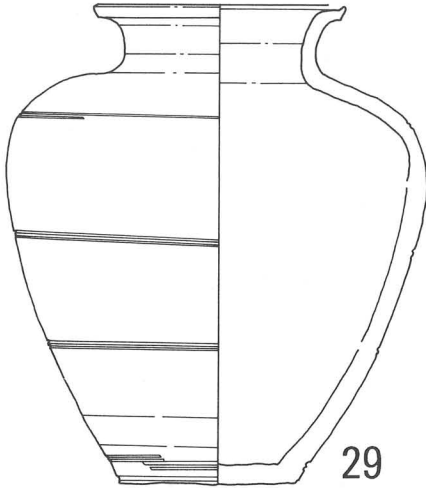
图5. 今宮神社出土 23.伊勢湾より引き上げ 24.25.一宮市中島墓出土
 26.知多古窯址群製



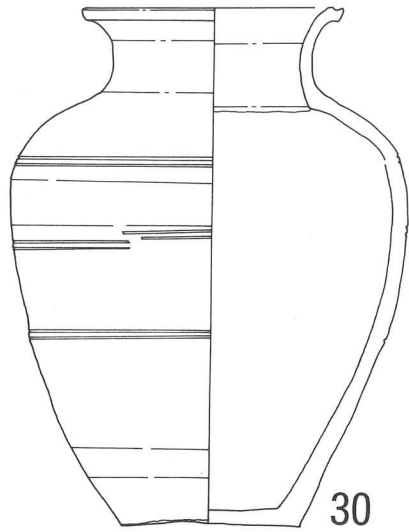
27



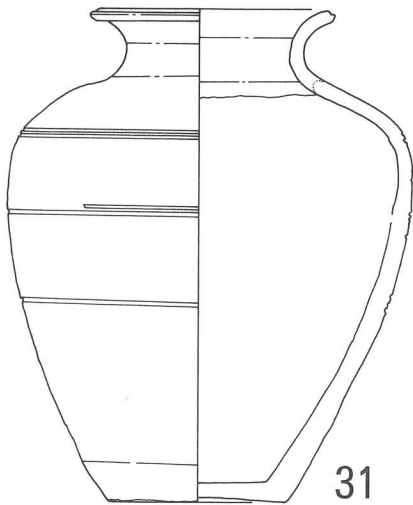
28



29



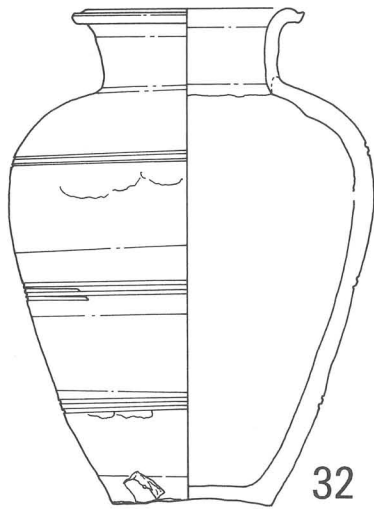
30



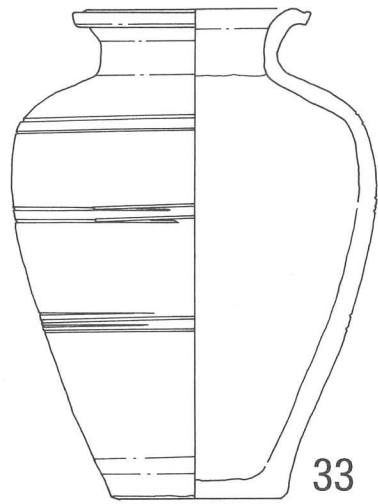
31



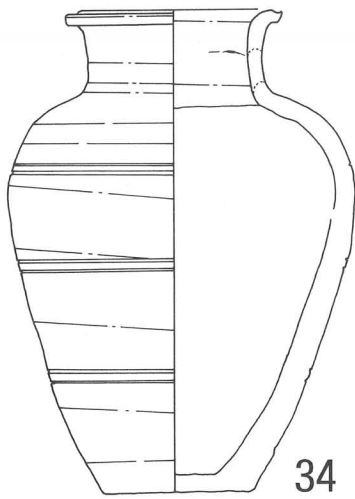
图6. 知多古窯址群製 27.29.伝、椎ノ木古窯出土



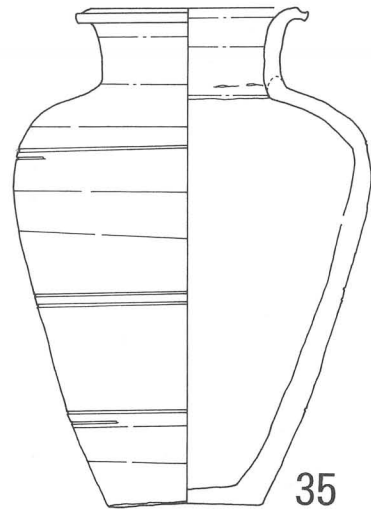
32



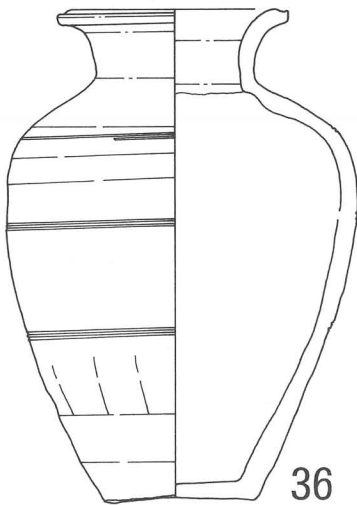
33



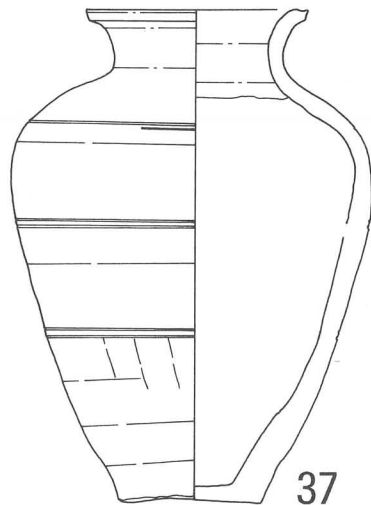
34



35

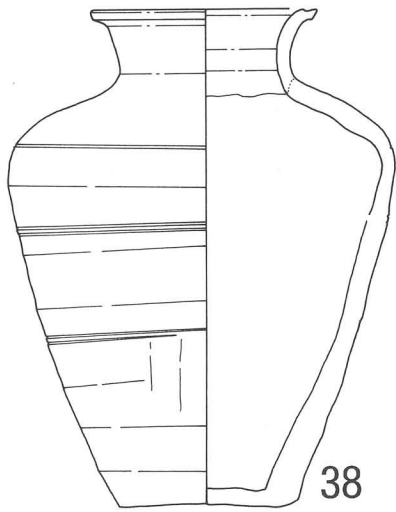


36

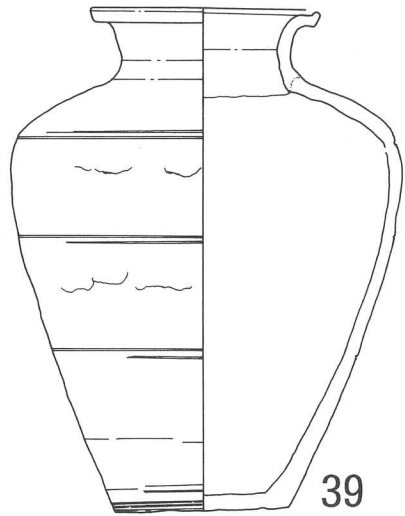


37

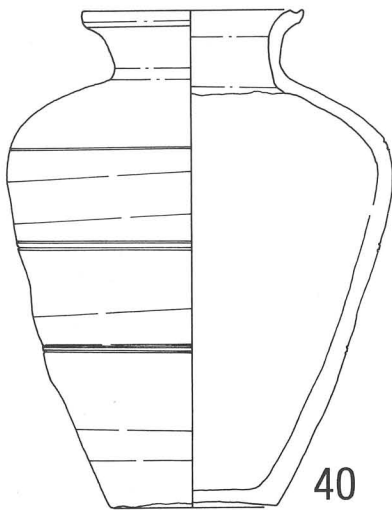
图7. 知多古窯址群製 35.伝、鎗場御林古窯出土 36.37.伝、椎ノ木古窯出土



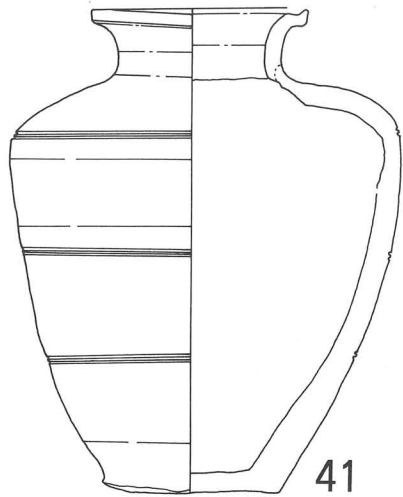
38



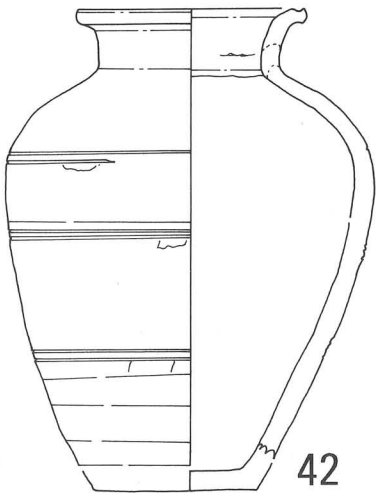
39



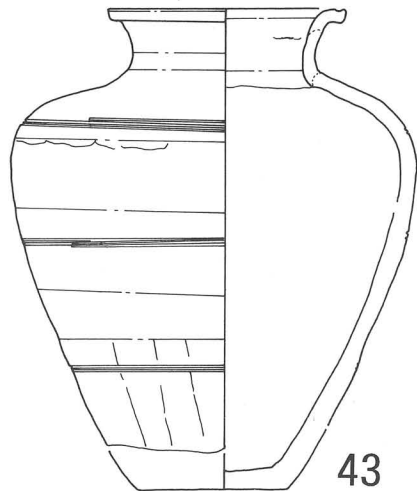
40



41

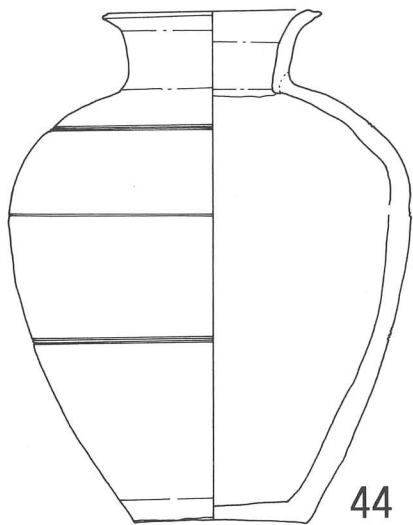


42

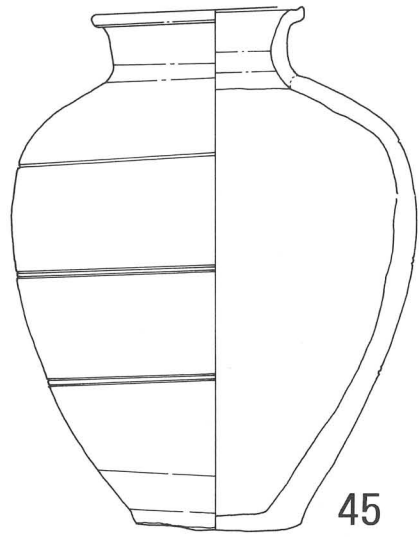


43

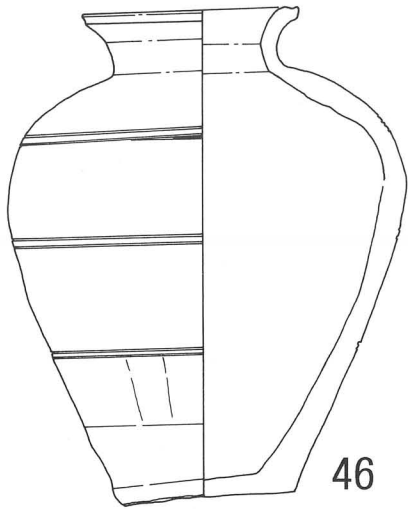
図8. 知多古窯址群製 38.39.40.伝、椎ノ木古窯出土 41.伝、金色古窯出土



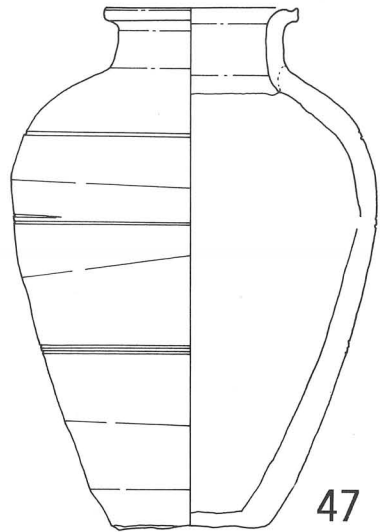
44



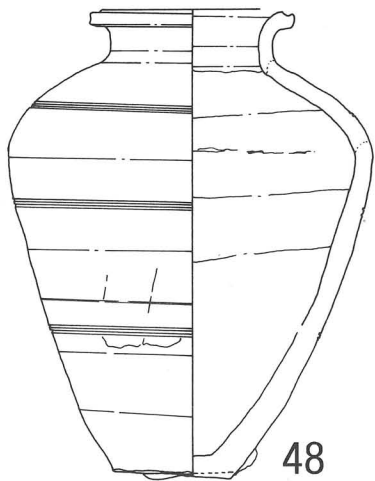
45



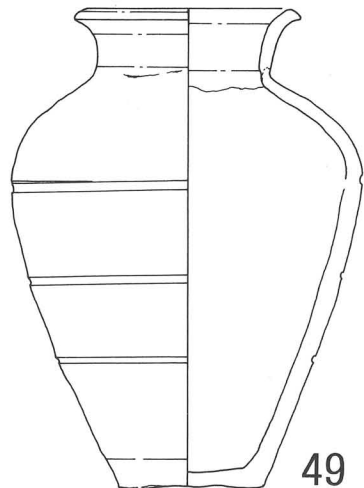
46



47



48



49

图9. 知多古窯址群製 44.伝、坊田池古窯出土 45.伝、柴山古窯出土
47.伝、大曾古窯出土 48.49.伝、椎ノ木古窯出土

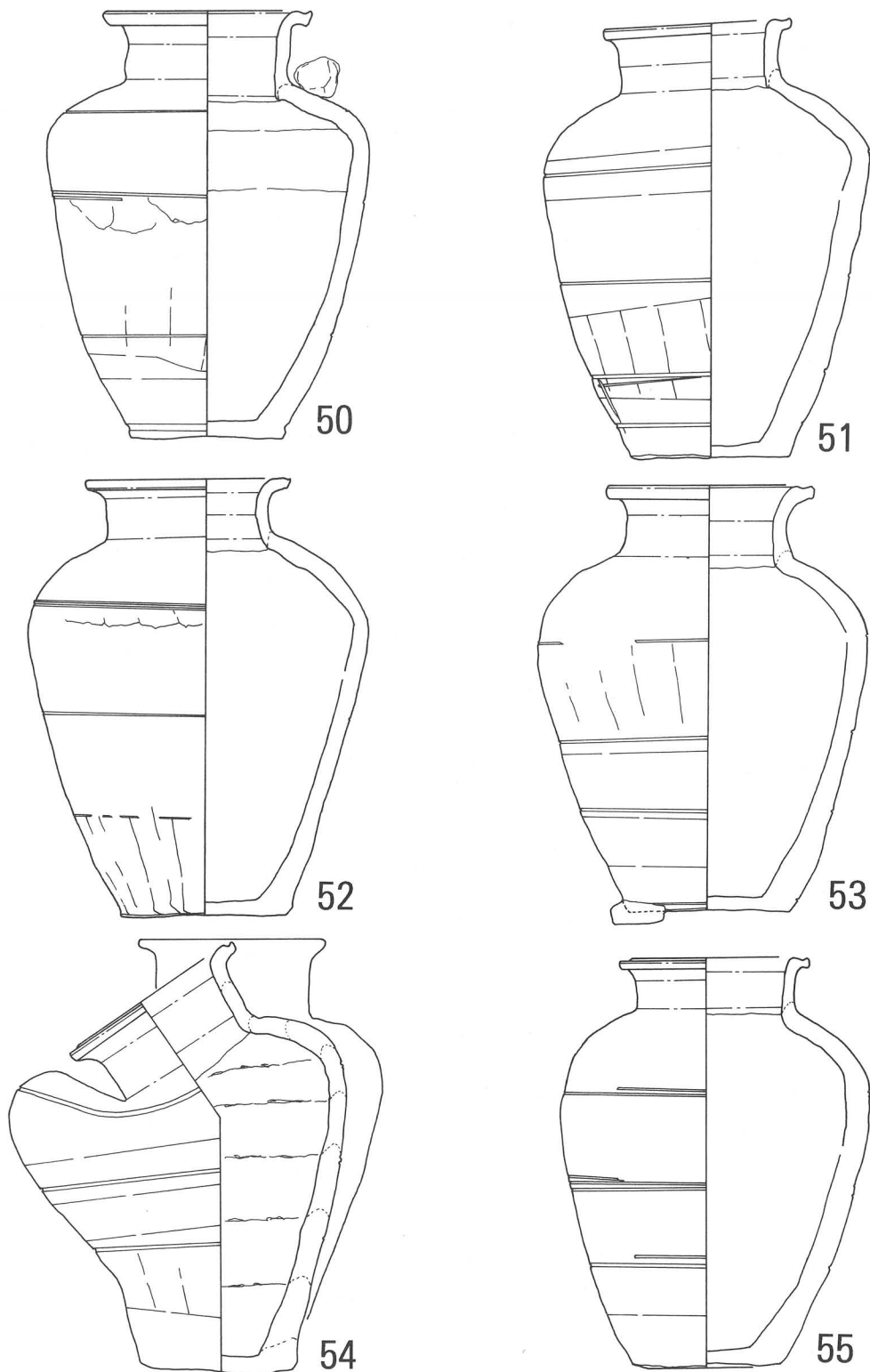


图10. 知多古窯址群製
 51.伝、土取畑古窯出土
 54.伝、金色古窯出土
 53.伝、椎ノ木古窯出土
 55.伝、繪心寺古窯出土

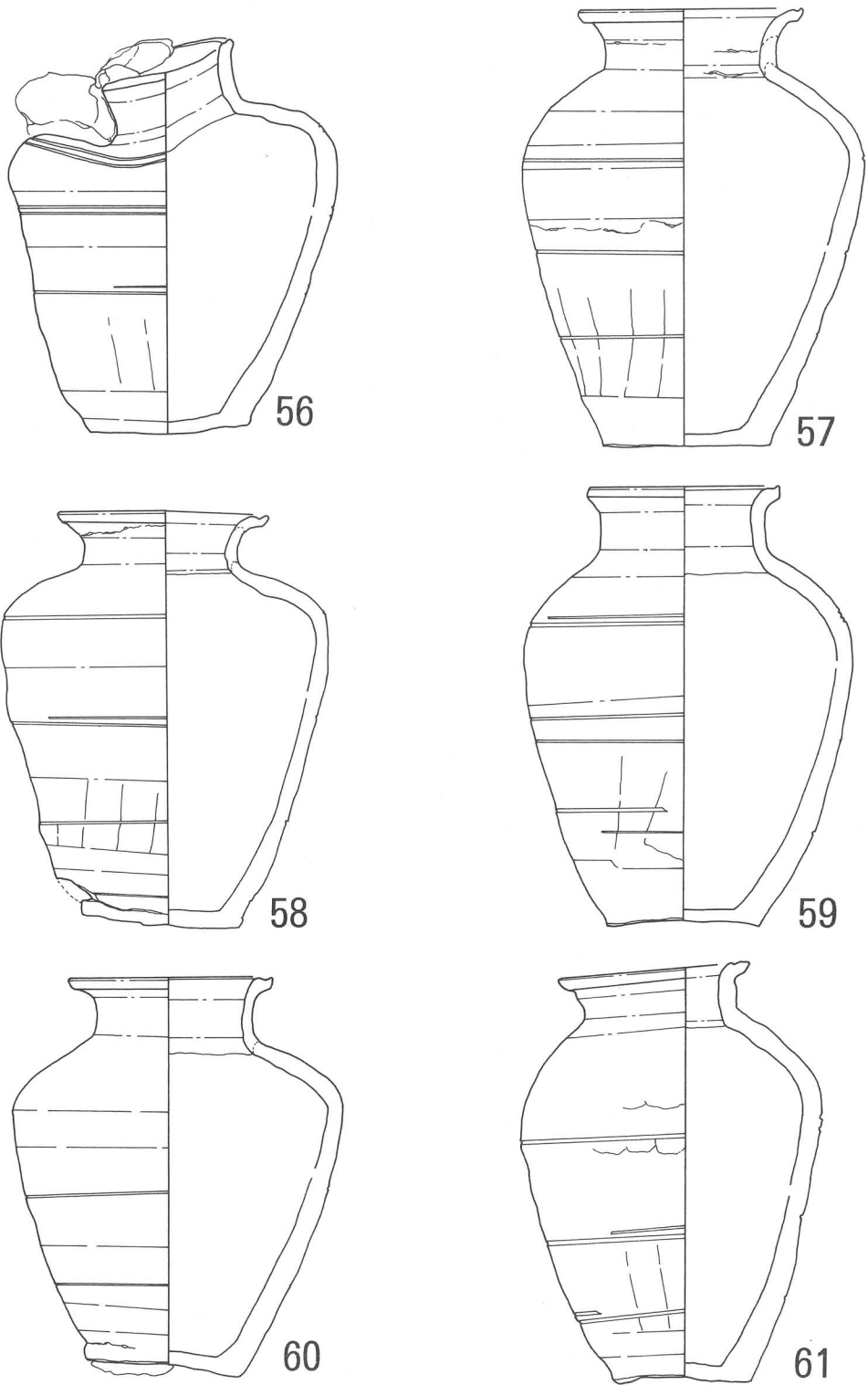
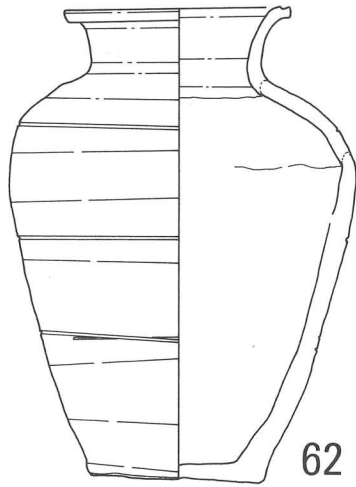
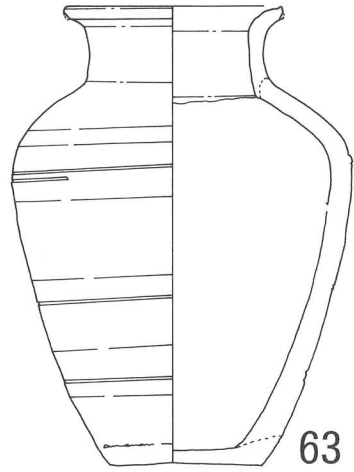


图11. 知多古窯址群製 56~61.伝、高砂山古窯出土

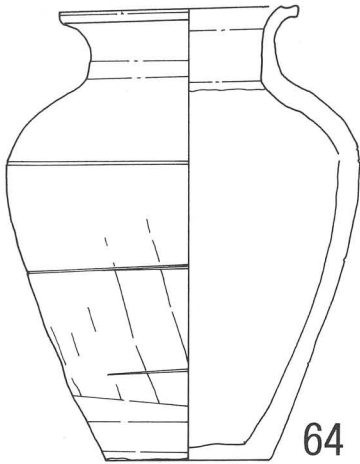
0 10cm



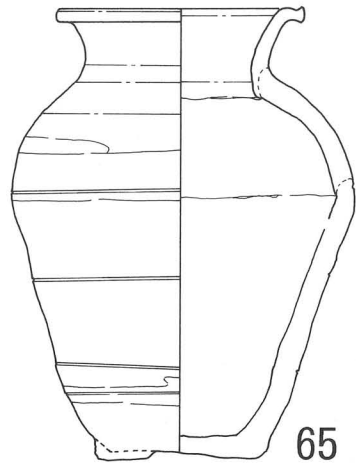
62



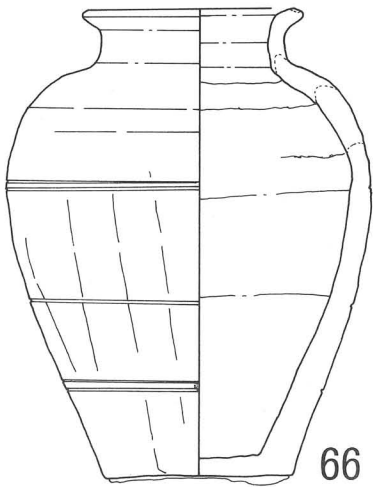
63



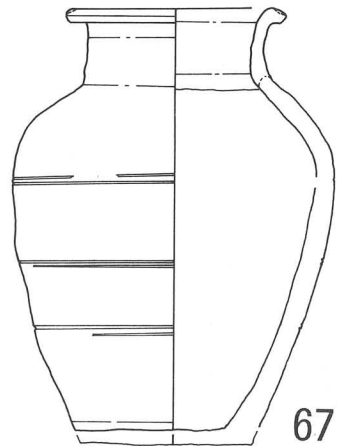
64



65



66



67

图12. 知多古窯址群製



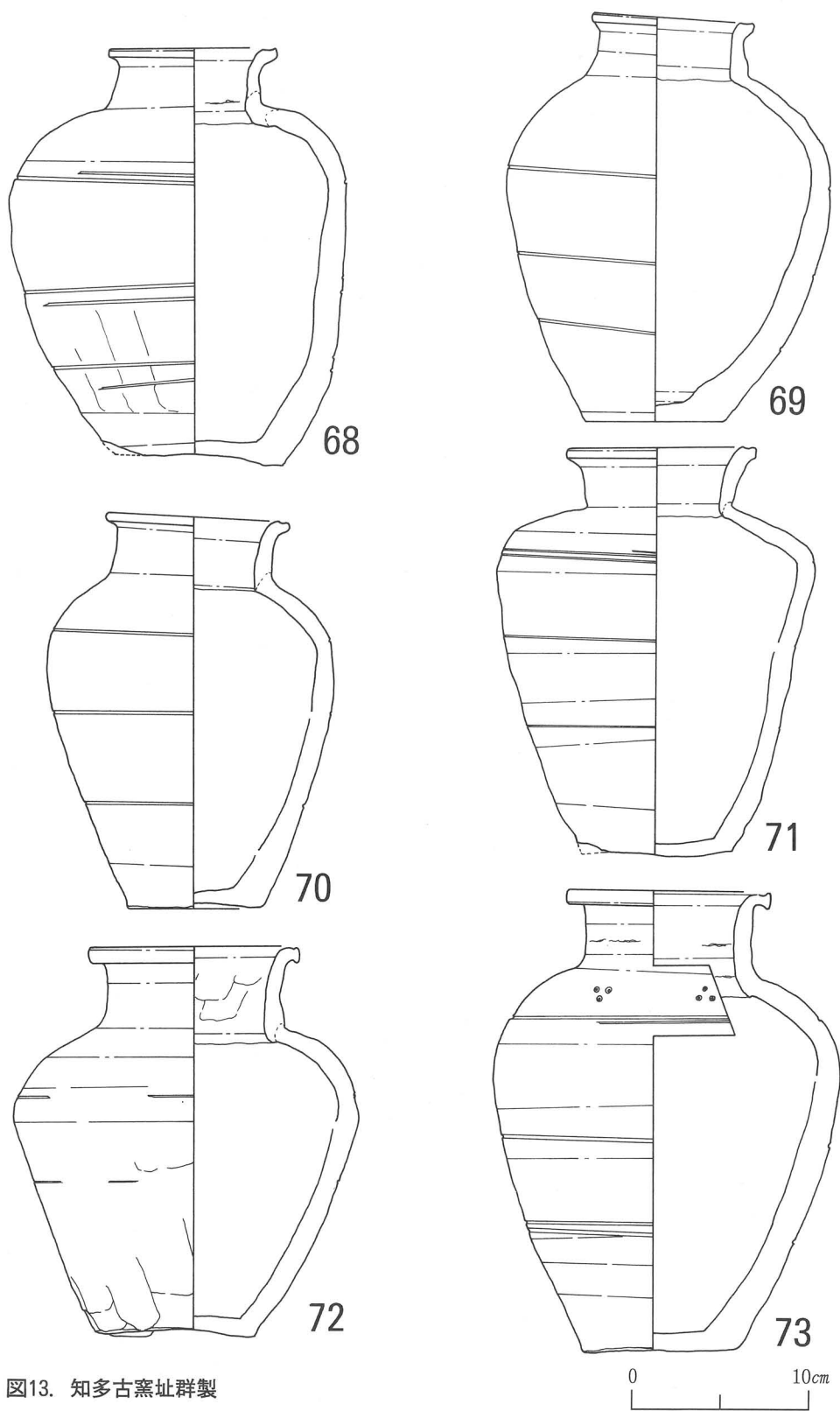


图13. 知多古窯址群製

古文書解読資料集

(富本家文書)

常滑市民俗資料館友の会古文書部会

今回収録した富本家文書は、江戸後期に常滑村保示浦方の庄屋を勤めた富本家に伝存した古文書のうちから、当時の漁業形態をうかがわせる資料のみを抽出したものである。

本資料を含む富本家文書は、現在常滑市民俗資料館に収蔵されている。

請取申拝借金之事
文金三拾兩也

三兩ツ、
当午暮より卯暮迄
十ヶ年返上之筈

右ハ当村浦方漁師共新規

漁網取立候付願之上如此拝借

相済無利当午暮より十ヶ年

之間右割之通毎年十二月

七日八日兩日之内 返上可仕候

其内漁方宜候ハ、年限切縮

返上可仕筈候所如件

寛政十年午五月 知多郡常滑村保示浦方

庄屋

———印

与頭

———印

頭百姓

———印

齊藤弥平殿

借用申金子之古支

一金五兩貳分也 但シ大綱御拝借

金也

右之金子借用申処実正也

右質物ニ者我等家屋敷

書入申候何時ニ而茂御入用之節者

賣拂御返済可致候為其

一札仍而如件

寛政三年

亥十月

借主

太左エ門

請人

三七郎

御村方

御役人衆中

借用申金子之事

一金拾五兩貳分也 但シ大綱御拜借

金也

右之金子借用仕候処実正也

右質物ニハ我等家屋敷書入

申候何時ニ而も御入用節者

急度返金可仕候若シ遲滞仕候ハ、

右質物賣拂御村方江少し茂

御苦労かけ申間敷候為後日之

手形仍而如件

借主

源六

受人

藤三郎

同断

源九郎

寛政三年

亥十月

御村方

御役人衆中

借用申金子之事

一金六兩也 但シ大綱御拜借

金也

右之金子借用仕候処実正也

此質物ニハ我等家屋敷書入

申候御入用之節ハ何時ニ而も

賣拂御村方へ少しも

御世話かけ申間敷候為後日

仍而如件

借主

長九郎

請人

長七郎

寛政三年

亥十月

御村方

御役人衆中

借用申手形之事

一金八両壹分但シ御拝借金也

右之金子儘ニ借用仕候処実正也
此質物ニ者我等扣小阿くり網片
手諸道具共ニ書入申候御入用
之節ハ何時ニ而茂急度返金

可仕候若シ遲滞仕候ハ、右質物

賣拂御村方江少も御世話

かけ申間敷候為後日仍而如件

借主

兵八

請人

□□

寛政三年

亥十月

御村方

御役人衆中

拝借仕金子之事

金百両也

但年々濟

右ハ今般御吟味之上鯛網出来漁業
仕候付右之通拝借仕候返上之儀者
年々漁事揚金高を以御指図次第
返納可仕候為其仍如件

知多郡常滑村

天明元年丑壬五月

網元 太郎左工門

同村庄屋

太左工門

同与頭

喜兵衛

御国方御役所

常滑市民俗資料館
研究紀要 IV

平成 2 年 3 月 31 日 発行

編集 常滑市民俗資料館
常滑市瀬木町4-203 TEL 〈0569〉 34-5290

発行 常滑市教育委員会

印刷 株式会社 好文

